松山市埋蔵文化財調査報告書39

上野遺跡

1994

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

上野遺跡

1994

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版Ⅰ　調査地上空から松山平野南部を望む

巻頭図版２　４区出土の磨製石剣（実大）

序

瀬戸内の温暖な気候は、その沿岸部に豊富な恵みを与えています。とくに、「伊予柑」に代表されるように、愛媛県は柑橘類の一大産地であります。本書で報告される「上野遺跡」周辺も、松山市にあっては主要な柑橘類・米の生産地として知られており、現在は果樹園となっている遺跡周辺の丘陵部には数多くの古墳が分布しています。現在の水田地の下に埋もれていた遺跡は今回の発掘調査により、中世後期段階においても既に水田として機能していたことがわかってきました。また、発掘調査では石庖丁の出土などもみられ、もっと古い段階においても稲作地帯であったのかもしれません。いずれにしても古くから、平野の経済を支えてきた地域であったことがしのばれます。

周辺の市指定史跡「八つ塚」に代表される古墳群や、県指定史跡「荏原城跡」の存在もこの生産力を背景にしてのことであったのでしょう。今回の調査成果は、地域の歴史を考える上でのひとつの大きなてがかりとなるものです。

最後になりましたが、調査に際しましてご協力を賜りました関係各方面のかたがたにこころから御礼申し上げます。

平成６年３月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団

理事長　田　中　誠　一

例　　言

1．　本書は、財団法人 松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センターが平成５年２月から平成６年３月にかけて実施した松山市上野町所在の松山市有地内における発掘調査の報告書である。

2．　発掘調査は、松山市道久谷97号線新設に伴う事前調査として行われた。

3．　屋外調査における遺構の実測は、大森一成を中心に宮脇和人、栗林和孝、保島秀幸が行い、製図は大森一成が行った。

4．　使用した方位は磁北である。

5．　遺物の実測・製図は小坂ゆかり、丹生谷道代、三好麻紀が行った。

6．　遺物図の縮尺は、土器・土製品を1/3に、石製品を1/2に統一している。

7．　遺構の撮影は栗田茂敏が、また遺物の撮影は大西朋子が行った。

8．　本書にかかわる遺物・記録類は松山市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。

9．　本書の執筆・編集は栗田茂敏が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　調査の経過 …… 1
1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査組織 …… 1

Ⅱ　遺跡をとりまく環境 …… 3
1．地理的環境 …… 3
2．歴史的環境 …… 3

Ⅲ　調査の成果 …… 7
1．層　序 …… 7
2．遺構と遺物 …… 7
（1）1区の調査 …… 9
（2）2区の調査 …… 17
（3）3区の調査 …… 23
（4）4区の調査 …… 29

Ⅳ　ま　と　め …… 33

抄　録 …… 34

図　目　次

図1　調査地周辺の遺跡分布 …… 4
図2　層序模式図 …… 7
図3　調査地の位置と区割り …… 8
図4　1区遺構全測図 …… 9
図5　1区水田耕土出土陶器 …… 11
図6　1区水田耕土出土土師器 …… 12
図7　SD6出土遺物（1） …… 13
図8　SD6出土遺物（2） …… 13
図9　1号畦畔と暗渠 …… 15
図10　1号暗渠出土石器 …… 15

図11　ＳＫ７遺物出土状況 …… 16
図12　ＳＫ７出土土師器 …… 16
図13　１区出土遺物 …… 16
図14　２区遺構全測図 …… 18
図15　列石平・立面図 …… 19
図16　２号暗渠平面図 …… 19
図17　２区水田耕土出土須恵器 …… 21
図18　２区水田耕土出土陶器・土師器 …… 21
図19　２区出土磁器 …… 22
図20　２区出土石器 …… 23
図21　土壙ＳＫ８ …… 23
図22　３区出土石器 …… 24
図23　３区遺構全測図 …… 25
図24　土壙ＳＫ１ …… 25
図25　土壙ＳＫ２ …… 25
図26　土壙ＳＫ３ …… 27
図27　土壙ＳＫ４ …… 27
図28　土壙ＳＫ５ …… 28
図29　土壙ＳＫ６ …… 28
図30　４区遺構全測図 …… 29
図31　４区出土遺物（１） …… 30
図32　４区出土遺物（２） …… 31

図　版　目　次

巻頭図版１　調査地上空から松山平野南部を望む
巻頭図版２　４区出土の磨製石剣

図版１　調査地全景（南より）　１・２区調査前全景（北東より）
図版２　１区遺構検出状況（南より）　１区遺構検出状況（北より）
図版３　１区擂鉢出土状況　１区土師器鍋出土状況
図版４　ＳＫ７遺物出土状況　ＳＤ６（南西より）
図版５　２区遺構検出状況（南より）　２区遺構検出状況（北より）
図版６　２区検出石列（東より）　２区検出石列（西より）

図版７　ＳＫ８（南東より）
図版８　３区検出耕起痕（北より）
図版９　ＳＫ１（南西より）
図版10　ＳＤ７と杭列（北東より）
図版11　４区磨製石剣出土状況
図版12　出土遺物（１）（陶器）
図版13　出土遺物（２）（土師器・瓦）
図版14　出土遺物（３）（須恵器・陶磁器）
図版15　出土遺物（４）（石製品）
３区西壁土層（東より）
ＳＤ１（西より）
４区遺構検出状況（北より）
ＳＤ７完掘状況（北より）
４区須恵器出土状況

Ⅰ　調査の経過

1．調査に至る経緯

1992（平成４）年10月、松山市が松山市上野町に建設中の市道久谷97号線の工事中、若干の遺物の出土がみられたとの連絡が松山市教育委員会（以下、市教委）になされた。連絡を受けた市教委は、工事の一時中断を要請し、８月27日担当係員２名を現地に派遣、現況把握につとめるとともに、９月２日に遺跡の範囲確認を目的とするトレンチ調査を行った。この結果、幅12ｍ、総延長400ｍにおよぶ工事区間のうち約200ｍの区間で遺物を包含する土層が確認されたため、この区間については緊急発掘調査が必要と判断された。

遺跡は、松山市が指定する周知の遺跡にあたってはいないが、「135 高尾田古墳群 弥生・縄文遺物包含地」の東方に隣接する地点にあたり、西方直近には「136 ドンダ原坂古墳群 弥生・縄文遺物包含地」・「137 南ヶ丘縄文・弥生遺跡 南ヶ丘古墳群」をひかえる。市教委は、遺跡発見の手続きを行い、遺跡の取扱いについて担当部局と協議した結果、記録保存を目的とした発掘調査を（財）松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）に依頼することなった。埋文センターは整理作業を含めた調査期間を1993（平成５）年２月12日から1994（平成６）年３月31日までの間として発掘調査を実施した。なお、屋外調査は平成５年９月27日をもって終了し、以降平成６年３月31日までの間が屋内整理期間となった。

2．調査組織

調査委託	松山市長		田中 誠一	
調査主体	財団法人 松山市生涯学習振興財団	理事長	田中 誠一	
		事務局長	渡辺 和彦	
		事務局次長	鶴井 茂忠	（平成４年度）
			一色 正士	（平成５年度）
	埋蔵文化財センター	所長	和田 祐三郎	（平成４年度）
			河口 雄三	（平成５年度）
		次長	田所 延行	
		調査係長	田城 武志	
		調査主任	栗田 正芳	
調査担当		調査員	栗田 茂敏	
		調査員補	大森 一成	

（屋外調査作業員）　蔵本義夫／栗原洋一／栗林和孝／田中茂樹／平岡孝史／保島秀幸／本多好則／松岡欣弘／水口美津子／宮脇和人／山口吉一／好川昇三郎／渡邊常信　　ほか

（屋内整理作業員）　小坂ゆかり／丹生谷道代／三好麻紀　　ほか

調 査 地　松山市上野町甲756番地　外

調査面積　2,400㎡

調査期間　平成５年２月12日～平成６年３月31日

II　遺跡をとりまく環境

1．地理的環境

遺跡は松山平野南部を西流する重信川の左岸約1.5kmに位置しており、松山市南方の伊予郡砥部町とほぼ境を接する付近にあたる。遺跡の南方4.5km付近には中央構造線が東西に横走し、構造線以北の西南日本内帯と以南の外帯とを分断している。前者は主に砂岩と頁岩の互層からなり、後者は安山岩や結晶片岩などの火山性の岩石によって構成されている①。遺跡南方からは外帯に属する三坂峠や上尾峠に水源を発する御坂川・砥部川が北流し、重信川に注いでいる。松山平野において主に磨製石器に利用される緑色片岩などの結晶片岩はこの砥部川の上流域にあたる外帯から運ばれたものである。

遺跡は上述の河川のうち御坂川左岸の河岸段丘上、標高57ｍに立地している。

2．歴史的環境

調査地周辺、重信川左岸の松山市域や、西方に隣接する砥部町域における遺跡分布、発掘調査例を概観すると、愛媛県立総合運動公園・とべ動物園の建設や、その他の大規模住宅開発、道路建設に伴う調査によって多くの成果があがっている。

旧石器は調査地西方1.5kmを北流する砥部川流域の城ノ向遺跡、宮内大畑遺跡や西方0.5kmの低丘陵東麓の土壇原Ⅵ遺跡、谷田池遺跡、西大池遺跡でナイフ形石器、有舌尖頭器、楔形石器などの出土がみられているが②、これらの遺物も古墳封土中や表面採集によって得られたものであって、該期の遺跡としての内容がよくわかっていないのは松山平野全域の旧石器時代遺物出土地と同様の現状である。

調査地周辺の縄文時代遺跡は豊富である。御坂川左岸の河岸段丘上の土壇原Ⅱ遺跡③では早期前半の、また南西の低丘陵上の谷田Ⅱ遺跡④では後期の竪穴住居址が検出されている。調査地北側に隣接する上野城跡遺跡⑤では晩期後半の石詰め土壙墓３基が検出されているが、これらの土壙墓に類似する土壙群が西方の砥部川左岸河岸段丘上の長田遺跡⑥でも検出されており、晩期の土壙墓群と理解されている。その他、西野遺跡⑦・高尾田遺跡⑧・水満田遺跡⑨等で後・晩期を中心とする遺物の出土がみられている。

周辺地域では弥生時代に入っても墓の造営は続けられ、特に前期の西野Ⅲ遺跡のように土壙墓69基、壺棺墓２基といった大規模な墓域が形成されている例がみられるが、該期の集落についてはあきらかになっていない。中・後期になると集落の検出例が増加する。中期前葉については不明な部分が多いが、中葉では水満田遺跡・高尾田遺跡などが知られ、特に水満

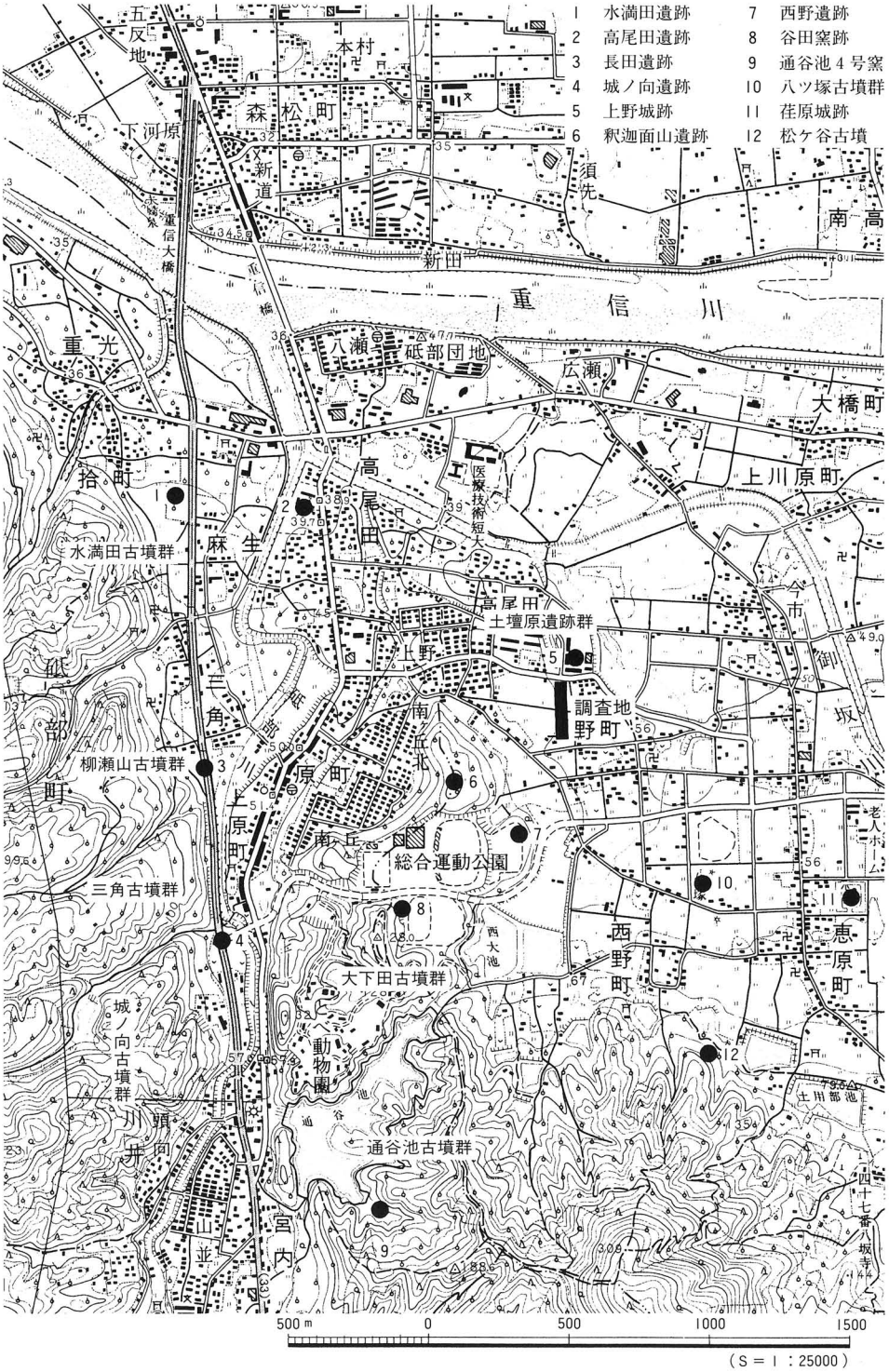


図１　調査地周辺の遺跡分布

田遺跡第１調査区の土器溜まり出土の土器群は該期の良好な一括資料である。中期後葉の集落も多く検出されているが、なかでも調査地西方や南西の丘陵上の釈迦面山遺跡⑩・西野Ⅲ遺跡などで検出された集落は高地性集落と評価されている。後期の遺跡としては、調査地北方にひろがる土壇原遺跡群⑪がよく知られている。このうち土壇原南遺跡は竪穴式住居23棟、掘立柱建物34棟ほかで構成される大規模な集落、また土壇原北遺跡は56基の土壙墓群などが検出された墓域であり、これらの墓とともに大型器台などの供献土器群の出土もみられている。

周辺の古墳時代の集落については不明な部分が多いが、古墳そのものは周辺の丘陵上、河岸段丘上に多く営まれており、その多くは横穴式石室を主体部とする後期古墳である。砥部川右岸の丘陵上に分布する釈迦面山・大下田⑫・古鎌山古墳群⑬などや御坂川左岸の川岸段丘上の土壇原・八つ塚古墳群⑭、松ケ谷古墳⑮などが代表的なものとしてあげられる。そのほか、箱式石棺を主体部とするものや粘土槨といわれているものが土壇原や釈迦面山古墳群に存在するが、これらの具体的な時期・内容などには不明な部分が多い。

隣接の砥部町は、砥部焼に代表される焼きものの町として知られているが、古墳時代以降の窯址も多く分布する地域である。愛媛県教育委員会や砥部町教育委員会によって数基の須恵器窯が調査されている。調査地南西方向の丘陵斜面に所在する谷田１・２号窯⑯は６世紀後半から７世紀前半代の須恵器・埴輪の併用窯である。また、砥部川右岸の通谷池窯址群・千足１号窯⑰は８世紀初頭に操業されたものである。

調査地周辺には、中世以降の城跡が多く分布している。新張城・尉之城・大友城・荏原城・上野城などがそれである。このうち、県指定史跡となっている荏原城⑱は一辺120ｍ、幅10～20ｍの濠に囲まれた城跡で四周に土塁が遺存している。築造年代は不詳であるが、南北朝頃の築造、中世末期の廃絶と推定されている。調査地の北に隣接する上野城⑲は1977年の発掘調査中に発見されたもので、荏原城と同じ頃の築造を推定されている。

砥部町内では近世磁器窯の発掘調査も行われており、1982年の（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター調査の大下田１・２号窯⑳では19世紀前半の磁器を出土している。

註

①『松山市付近の地質』松山地学会　1980

②『松山市史料集 第２巻 考古編Ⅱ』松山市教育委員会 1987

③長井数秋　「土壇原遺跡群」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県 1986

④長井数秋　「上野遺跡（谷田Ⅱ遺跡）」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県 1986

⑤「上野城跡遺跡」『松山市史料集 第２巻 考古編Ⅱ』松山市教育委員会 1987

⑥岡田敏彦　「長田遺跡」『一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター 1981

⑦長井数秋　『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』愛媛県教育委員会 1979

⑧相田則美　『高尾田遺跡』砥部町教育委員会 1978

⑨岡田敏彦　「水満田遺跡」『一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター 1980

⑩坂本安光　「釈迦面山遺跡群」『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』愛媛県教育委員会 1981

⑪　前掲註②文献

⑫坂本安光　「大下田古墳群」『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』愛媛県教育委員会 1981

⑬岡田敏彦　「古鎌山古墳」『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』愛媛県教育委員会 1981

⑭森　光晴　「八ツ塚古墳」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県 1986

⑮森　光晴　『かいなご・松ケ谷古墳』松山市教育委員会 1975

⑯坂本安光　「谷田Ⅴ・Ⅵ遺跡（谷田１号・２号窯跡）」『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』愛媛県教育委員会 1981

⑰宮崎泰好　「通谷池４号窯跡・千足１号窯跡」『砥部町内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』砥部町教育委員会 1992

⑱⑲　前掲註②文献

⑳岡田敏彦　「大下田１・２号窯跡」『愛媛県営総合運動公園（動物園）整備計画関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』愛媛県教育委員会 1984

Ⅲ　調査の成果

1．層　序（図２）

南北総長200ｍ、東西幅12ｍの狭長な調査地は、現在水田として利用されており、現況の地表面での標高差は、南北200ｍの間で0.4ｍ、北部が南部に比べて低くなっているが、地山面での標高差はほとんどみられない。層序は、基本的には近・現代の２枚の水田耕土下に４層に分層される褐色系の粘質土層があり、このうち第７・８層、黒褐色粘質土、暗褐色粘質土に遺物が含まれている。遺構は第８層上面で検出されるが、この第８層は部分的に存在しない地点があり、これらの地点では下層の地山第９層黄褐色シルト層上面で遺構が検出される。

2．遺構と遺物

調査地は、そのほぼ中央部を東西に走る松山市道久谷38号線によって南北に分断されている。調査は、手順上この市道に分断された南北の区域をさらにそれぞれ２つの区画に分けた合計４区画に設定して行った。区画は北から順に１～４区とし、まず３区から調査を開始、その後１・４・２区の順で実施した。

遺構は、調査区のほぼ全域にわたって検出された水田遺構がその主たるものである。以下、１区より順に記述する。

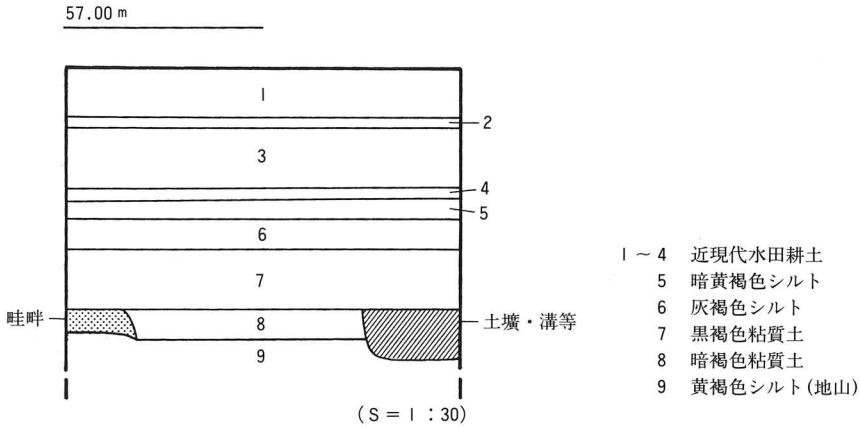


図２　層序模式図

図3　調査地の位置と区割り

（S＝1：5000）

（1） 1区の調査

水　田（図4・9）

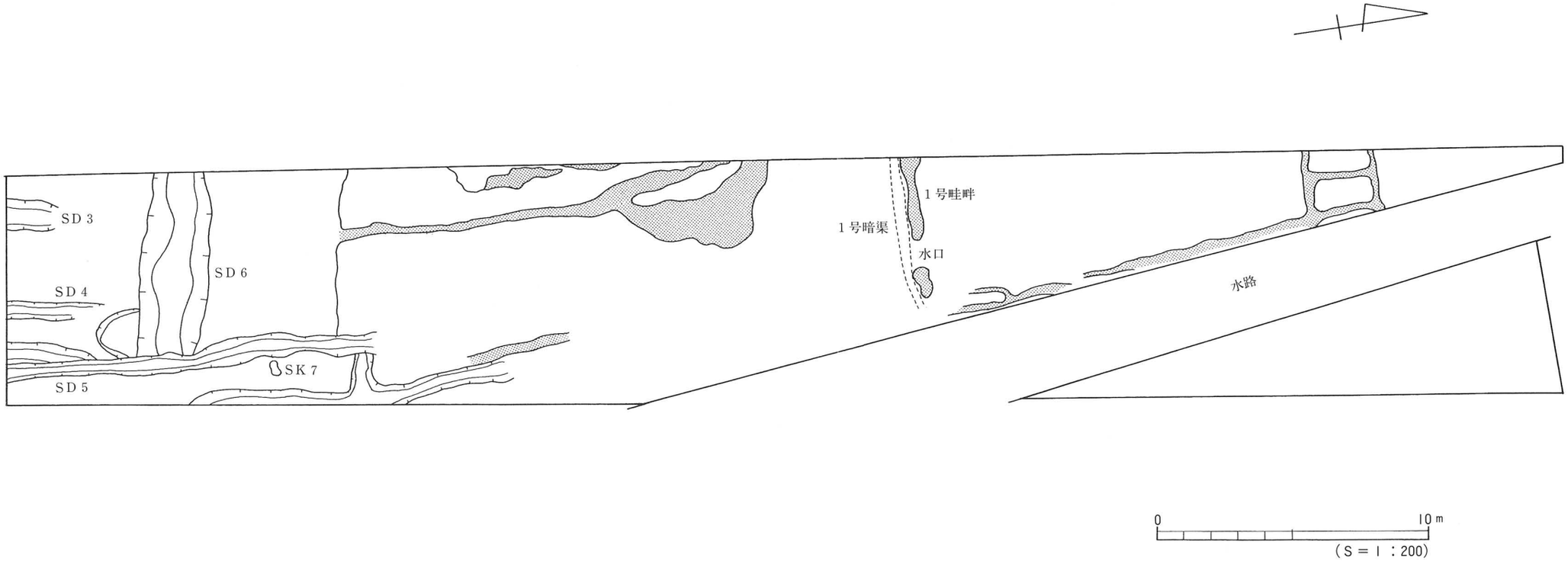


図4　1区遺構全測図

市道以北の総長約100ｍの部分が１・２区で、うち北方の60ｍの区間を１区としている。検出された水田関係の遺構は、畦畔、水口、暗渠、溝である。水田は本来１・２区全域をにひろがっていたものと思われるが、１区南端から15ｍの間の部分では削平され、畦畔などの遺構は検出されなかった。この部分で検出された南北方向の数条の浅い溝状遺構は耕作の痕跡と思われる。図４に示されたアミ目部分が畦畔で、黒灰色の畦で黒色の水田面を区画している。このうち、東西方向の１号畦畔には水口と考えられる途切れがあり、この部分のみに石を組んでいる。南側から北側の水田に水を落とすためのものであったものと考えられる。調査区北端では、畦畔で区画された１×２ｍ規模の小区画が検出されている。これらの水田区画は現在の水田地割から概ね５°西へ偏し、ほぼ磁北に沿うようなかたちで設定されている。水田耕土中から須恵器・備前擂鉢、土師器鍋等少量の遺物が出土した。

また、１号畦畔の南に平行して沿うようなかたちで暗渠状の集石列が検出された。１区南部の溝ＳＤ６からも石が検出されており、水田としては削平されてはいるものの同様の暗渠状の施設であったものと思われる。

水田耕土出土遺物（図５・６）

陶 器（図５）

青磁碗（１）　青磁碗口縁部片、復元口径13.4cm、残存高4.1cmを計る。釉は緑がかった飴

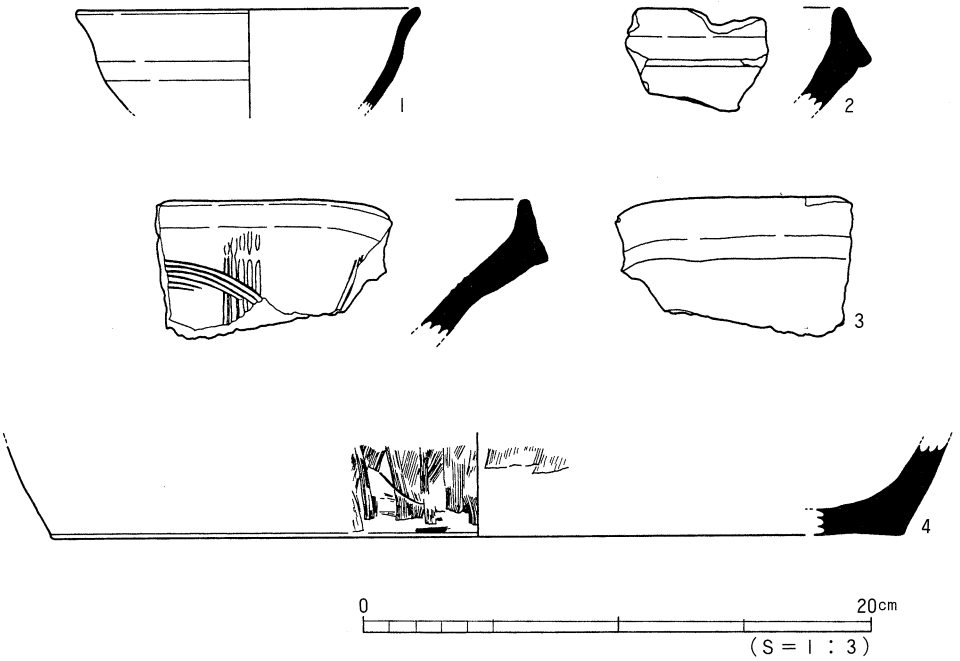


図５　１区水田耕土出土陶器

色に発色している。

備前擂鉢（２・３）　口縁部片２点、上方に立ち上がった断面三角形の縁帯状口縁を持つ。３は片口部付近の片、放射状に施された５本単位の粗い櫛描き条線とこれを切って斜めに交差する条線がある。２は赤褐色の色調を呈するが、３は青灰色に焼成されている。

備前甕（４）　底部小片、復元径34.4cmを計る。

土師器（図６）

鍋（５～12）　口縁部片６点と脚部片２点の出土がある。いずれの口縁部片も断面が鈍い三角形状をなす突帯を持つが、５・６のように口端部をやや下った位置に貼り付けられるものと、これらよりも下位に突帯を持つもの８、口端部に接してほとんど口端部と一体になるもの７・９・10とがある。口径の復元できる９・10ではそれぞれ21.4cm、24.4cmを計る。

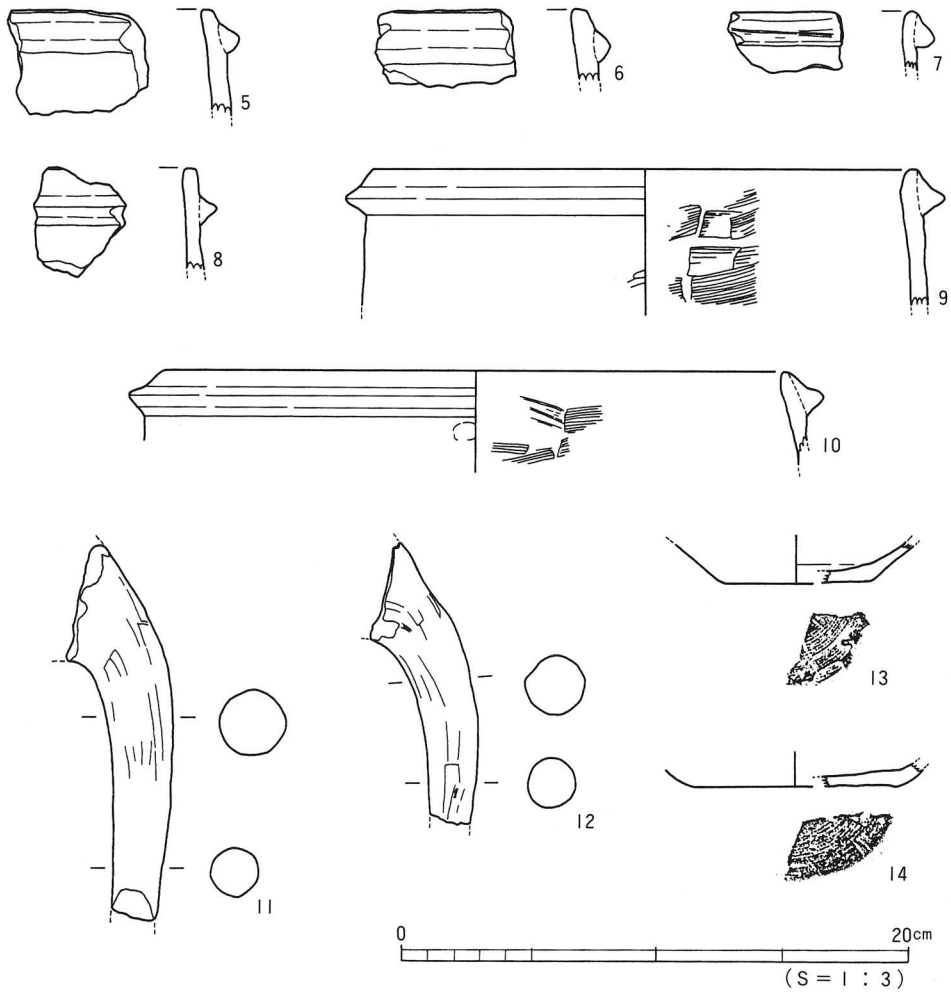


図６　Ⅰ区水田耕土出土土師器

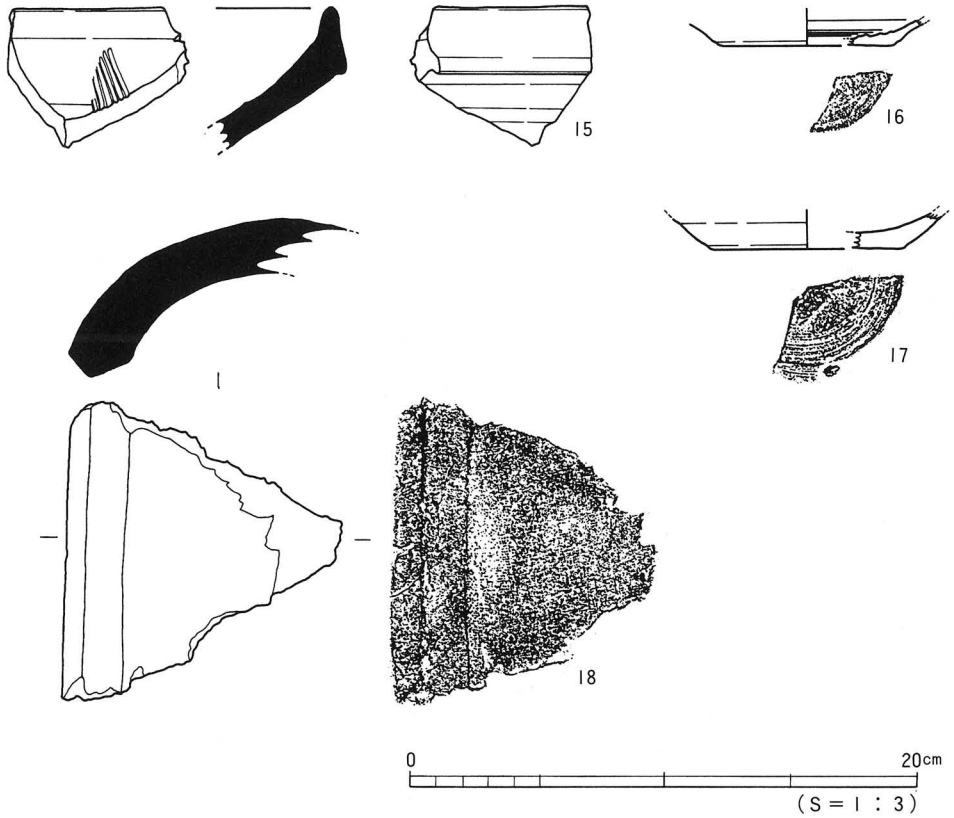


図7　SD6出土遺物(1)

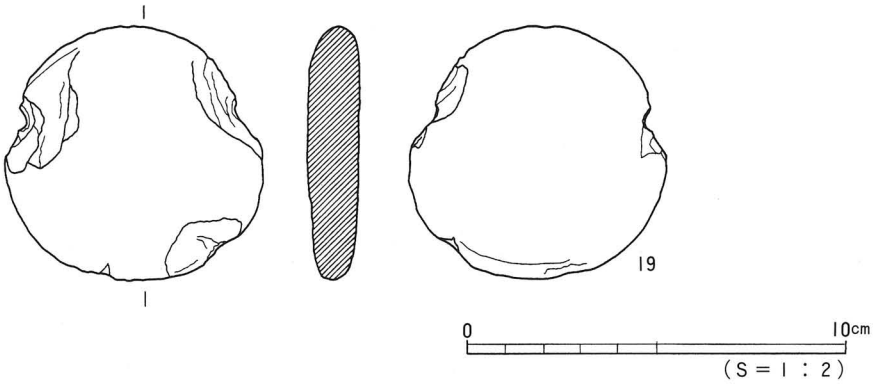


図8　SD6出土遺物(2)

坏（13・14）　底部片２点の出土、いずれも回転糸切りによる切り離し痕が観察できる。14は皿であるかもしれない。

ＳＤ６出土遺物（図７・８）

土器・瓦（図７）

備前擂鉢（15）　水田耕土出土の12・13と同様の形状をなす口縁部片、赤褐色に焼成されている。

土師器坏（16・17）　底部回転糸切りの坏小片。

丸瓦（18）　無文の丸瓦片、須恵質の焼成で、裏面には布目痕が観察される。

石製品（図８）

石錘（19）　溝内で検出された礫群のうちの１点として出土した。直径6.8cm、厚さ1.4cmの緑色片岩の円礫の３箇所を打ち欠いている。重量104.3ｇを量る。

１号暗渠出土遺物（図10）

打製土掘り具（20）　暗渠に詰められた礫のなかに打製土掘り具が１点ある。緑色片岩製で、長さ13.7cm、最大幅5cm、最大厚1.3cmの短冊形を呈する。

土　壙

この調査区では水田遺構の他、土壙ＳＫ７が１基検出されている。長径0.8ｍ、短径0.5ｍの不整楕円形状のプランをなし、土師器坏１点の出土をみている。

ＳＫ７出土遺物（図12）

土師器坏（21）　口径10.4cm、底径5.8cm、器高2.5cmの底部回転糸切りの坏で、若干内湾気味に斜め上方に開く器形をなす。外底面以外の内外面に横撫で痕が明瞭に観察される。

その他の遺物

水田検出に至るまでの近・現代の水田耕土中から以下の２点の石製品・石材の出土がみられている。

石製品（図13）

石錘（22）　長さ11.3cm、幅3.9cm、厚さ1.4cmの楕円形状の偏平礫の長側縁の対向する２箇所を打ち欠いた礫石錘、重量120.1ｇを量る。緑色片岩製。

サヌカイト原材（23）　ほとんどすべての面に灰黄色の風化面を残した石器素材の小礫である。

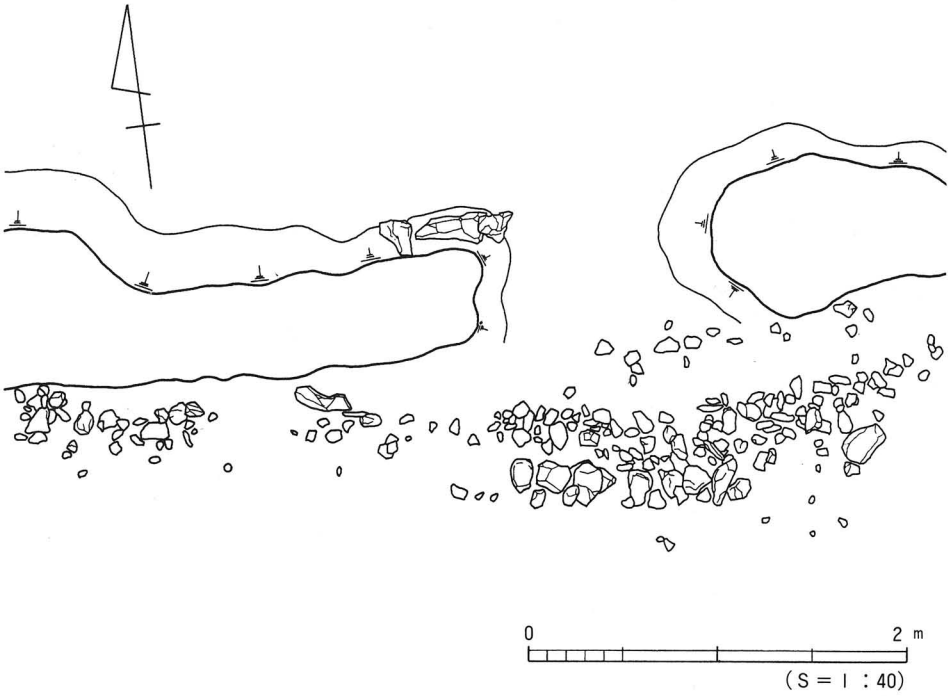


図9　1号畦畔と暗渠

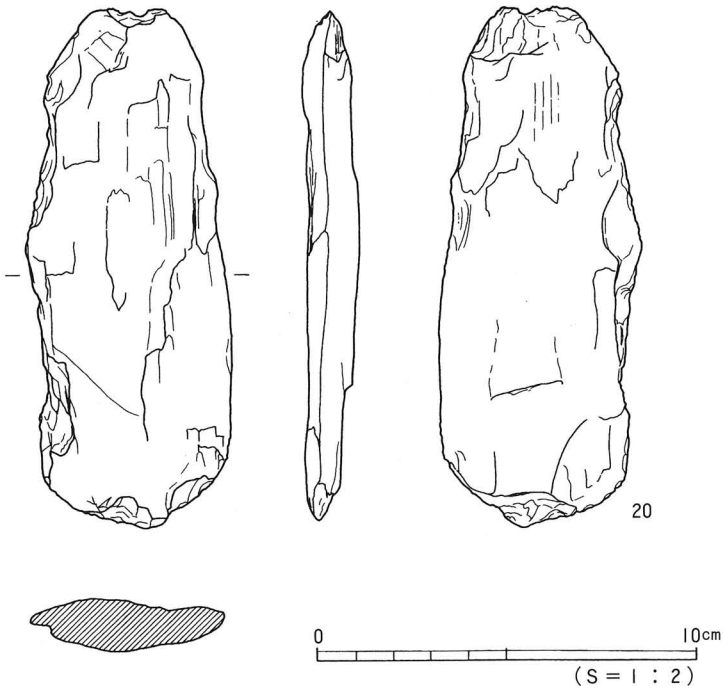


図10　1号暗渠出土石器

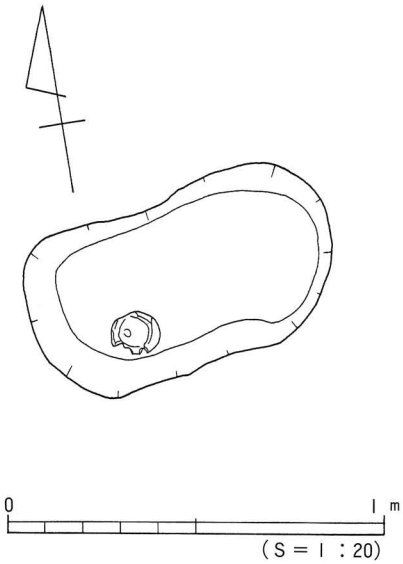


図11　SK7遺物出土状況

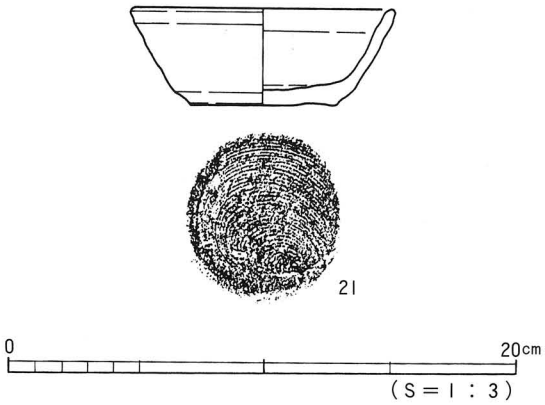


図12　SK7出土土師器

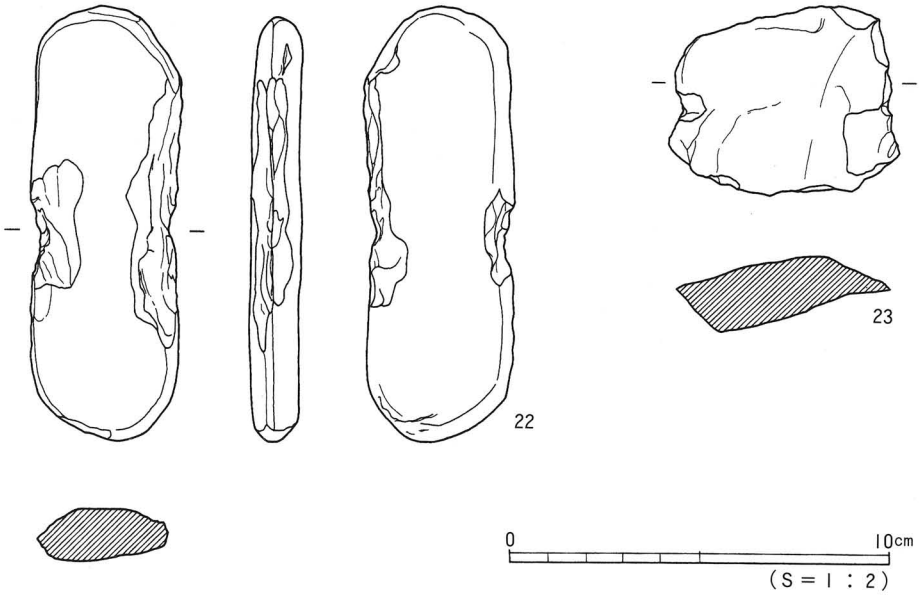


図13　1区出土遺物

（2） 2区の調査

水　田（図14～16）

2区においても畦畔等の水田遺構が検出されたが、その区画方向は1区水田から約20°東へ振れる。このうち、東西方向の列石を伴った段は水田区画の痕跡と思われる。なお、この列石には1区1号畦畔と同様に途切れる部分があり、水口として機能していたものと考えられる。南北方向の2号暗渠は、他の水田遺構よりも下る時期のものである。その他、水田下面より隅丸長方形の土壙ＳＫ８が検出されたが、遺物の出土はみられなかった。

水田耕土出土遺物（図17・18）

須恵器（図17）

陶硯（24）　陸部復元径10.8cmを計る円面硯で、脚台部には断面三角形の突帯が1条巡る。突帯直上には円形と方形の透孔が交互に施される。

坏（25）　復元口径9.6cmの坏身片、内傾する短い口縁部を持つ。

陶器・土師器（図18）

備前擂鉢（26）　片口部の破片、斜め上方に延びる口縁部下に鈍い段を持つ。片口部は隅丸方形状に引き出される。

擂鉢（27）　これも片口部の片であるが、26よりは下る時期のもの、産地は不詳である。

備前壺（28）　直径約17cmに復元される平底の底部片。

鍋（29・30）　土師器鍋の脚部片2点。

その他の2区出土遺物（図19・20）

水田遺構の上層や、2号暗渠の集石に伴って以下の磁器片や石製品の出土がみられている。

磁 器（図19）

碗（31～34）　31は染付丸腰碗、釉は若干白濁し、外面に斜格子文が呉須によって施される。32は高台の高い広東碗で、淡いオリーブ色の釉がかけられ、見込文を持つ。胎土は灰白色を呈している。33・34は肥前系染付小碗で、いずれも型紙摺りの花卉文が施される。33には破損孔を補修した焼継の痕跡が観察される。

皿（35～39）　いずれも口径11cm前後の小皿で、36～38のような丸皿と35・39のように端反りになるものとがある。35・36が呉須による染付、37･38が色絵で、37では赤・金を用いた花卉文を施されるが金の部分はほとんど剝離している。38は深い緑と明るい青とを使った楓文である。39は、見込に陰刻文を持った白磁である。

石製品（図20）

石錘（40）　結晶片岩礫の一側縁を打ち欠いた石製品の破片で、錘として用いられたものと考えられる。

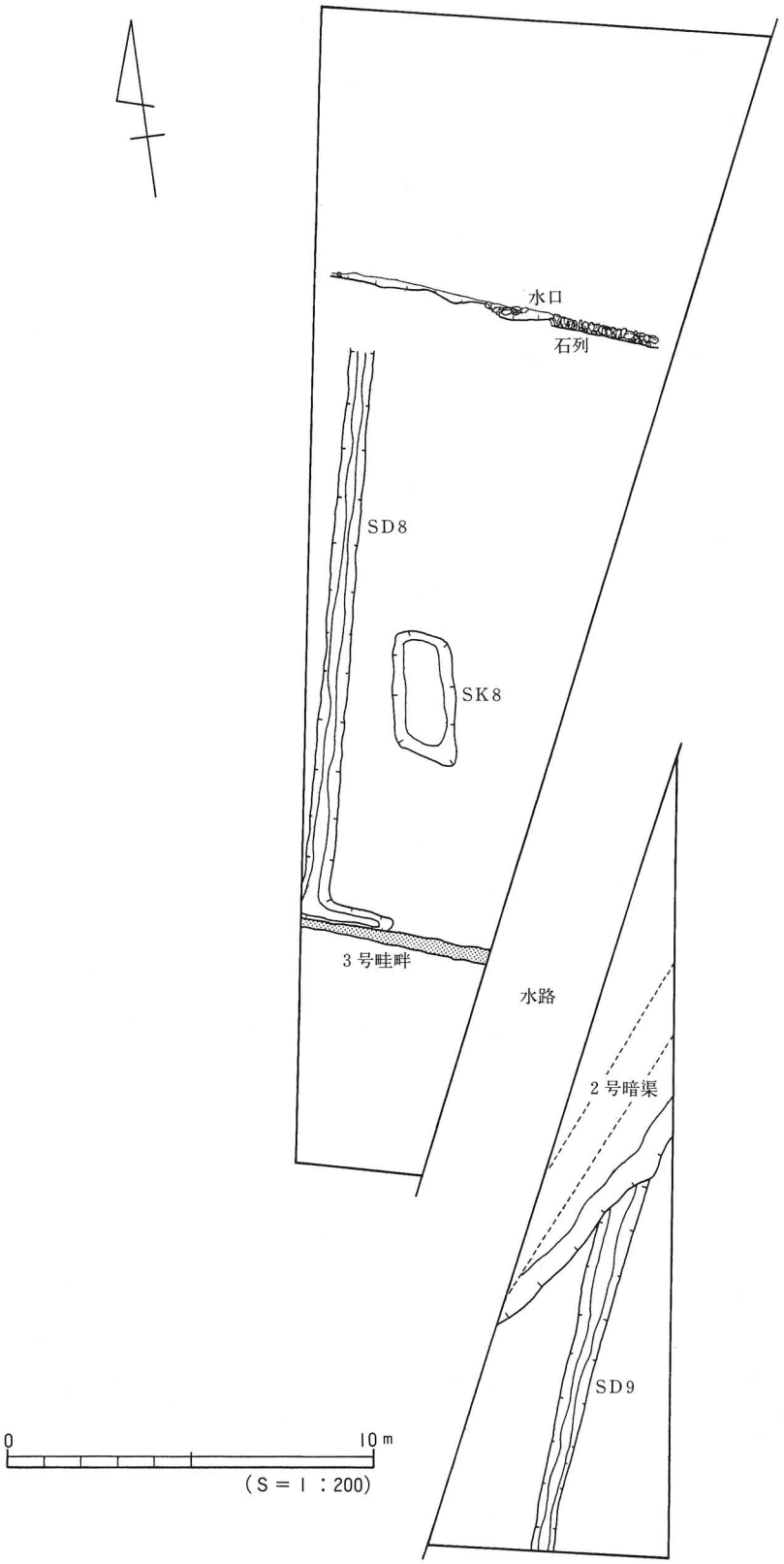


図14　2区遺構全測図

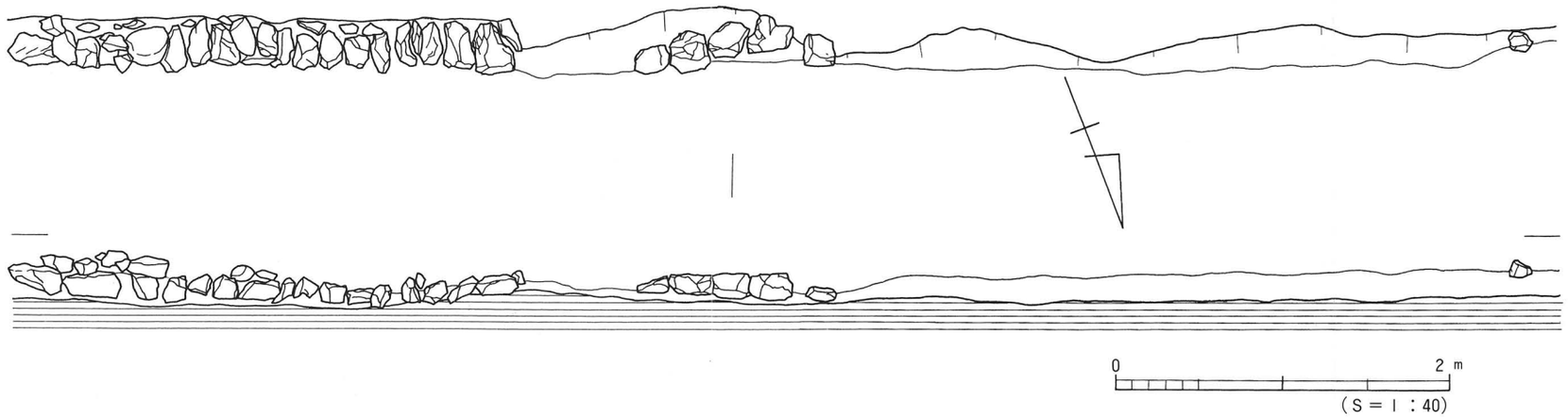


図15　列石平・立面図

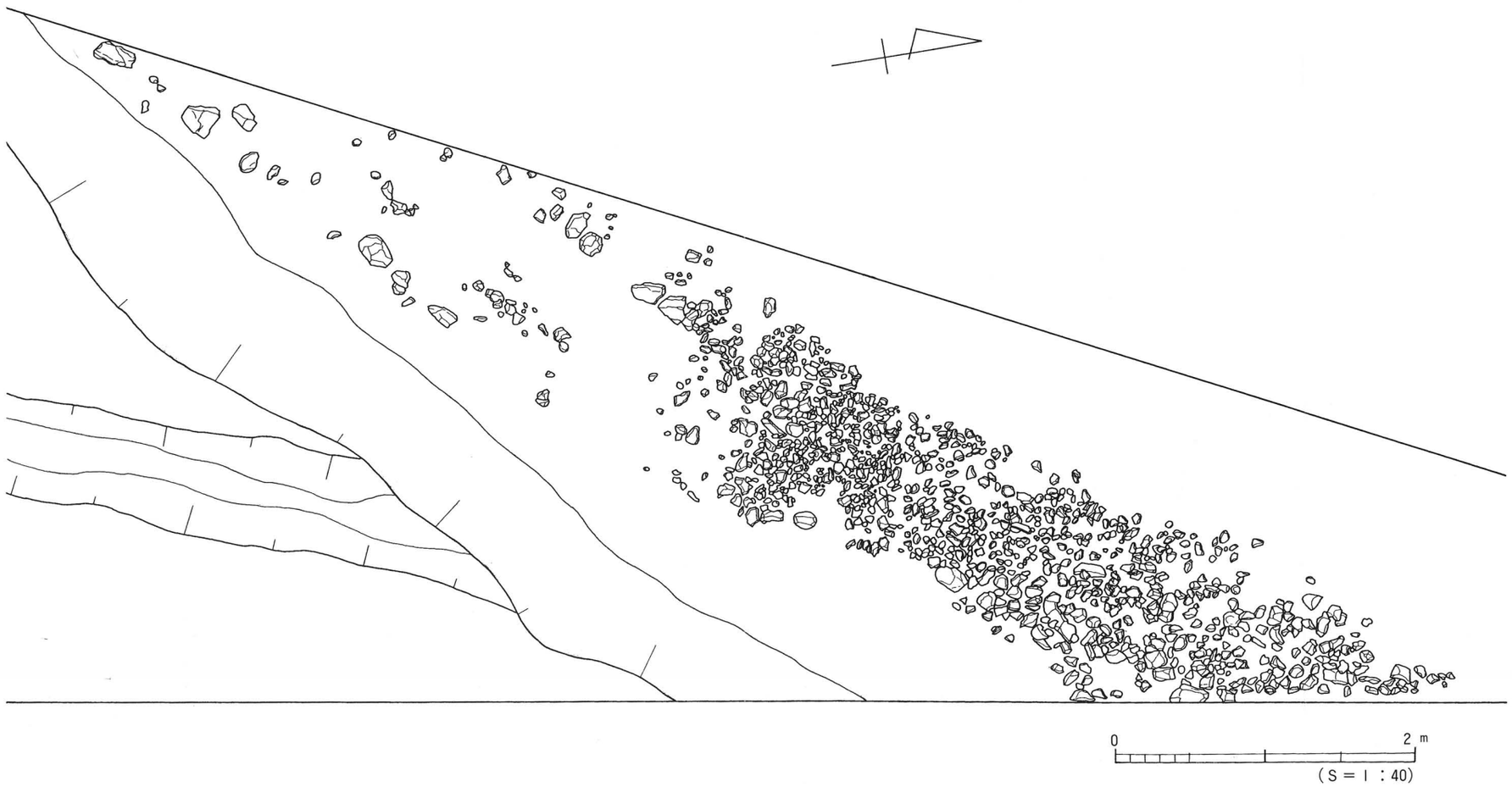


図16　2号暗渠平面図

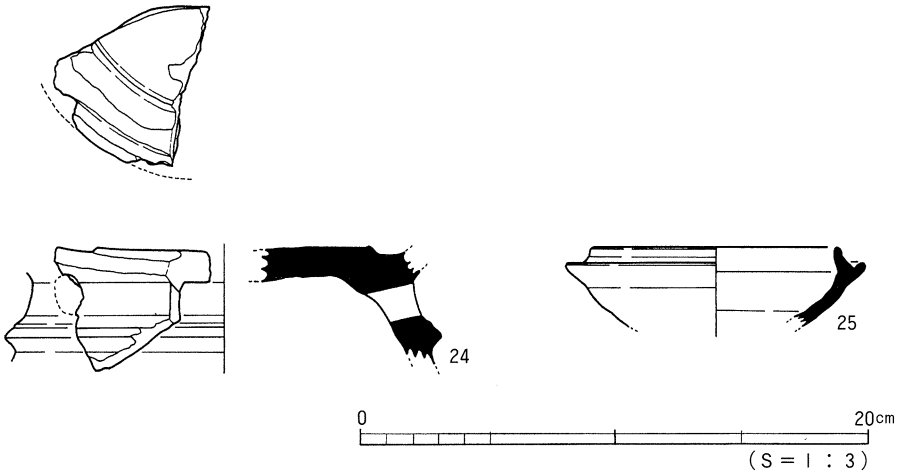


図17　2区水田耕土出土須恵器

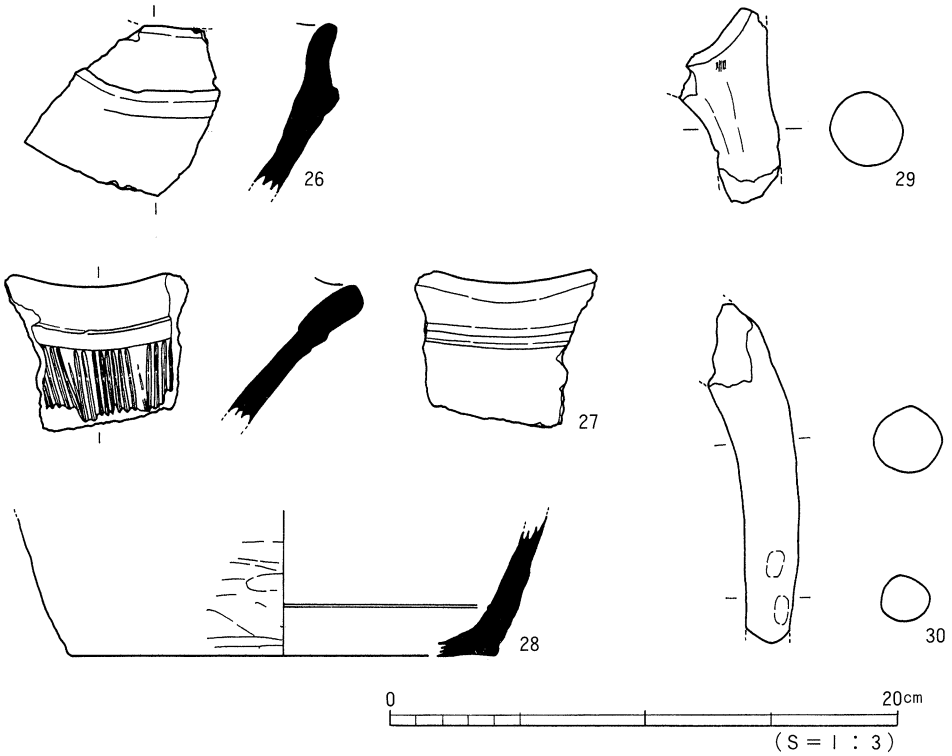


図18　2区水田耕土出土陶器・土師器

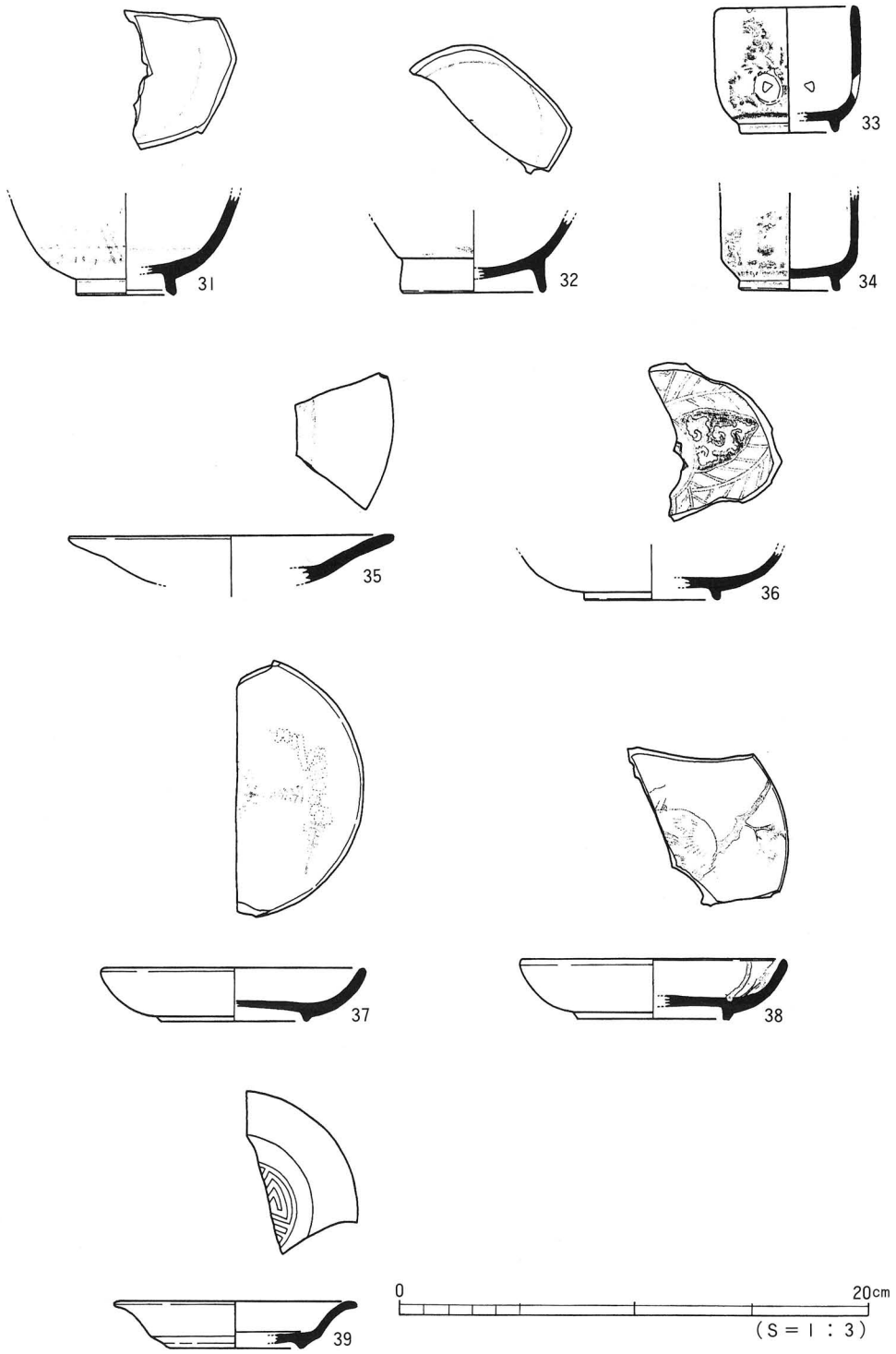


図19　2区出土磁器

石鏃（41）　サヌカイト製凹基鏃で、基部の一端を欠失している。全長2.9cm、現況重量1.26gを計る。

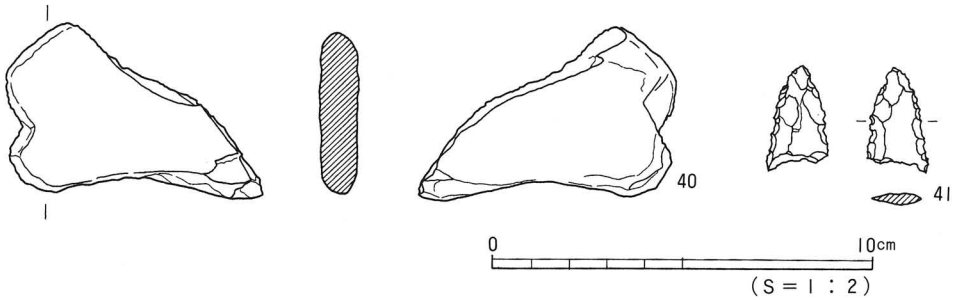


図20　2区出土石器

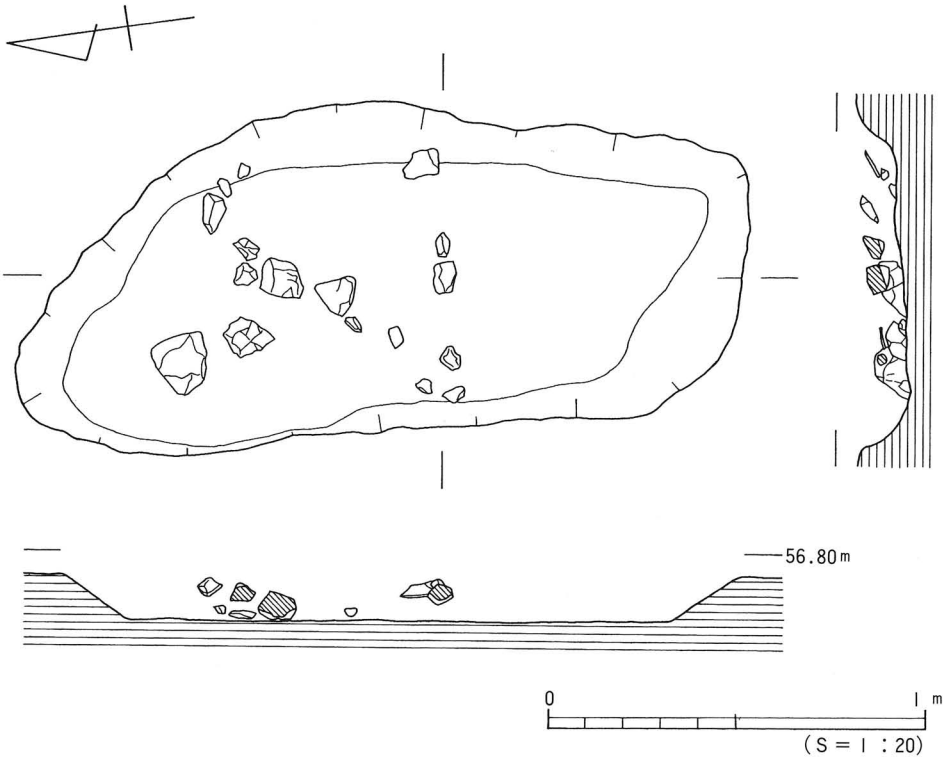


図21　土壙SK8

（3）3区の調査

遺　構（図23）

3・4区は市道以南の長さ約100mの調査区で、そのうち北70mの区間が3区にあたる。明確な水田遺構は検出されなかったが、調査区北半で耕起痕と考えられる畝状の浅い窪みが南西から北東方向に走っているのが検出された。また、これらの窪みに直交して走る溝2条が

ある。調査区南半では土壙6基と不整形の窪み2基が検出されたが、そのいずれもから遺物の出土はみられなかった。

3区出土遺物

この区における図化可能な遺物の出土は、以下の石器2点にとどまった。

石 器（図22）

石庖丁（42）　背部が若干弧を描くかたちになるが、形態的には長方形の範疇に属するものである。かなり使いこまれているようで、鈍い刃部は鋸刃のような凹凸を呈している。緑色片岩製。

石斧（43）　緑色片岩製の伐採斧であるが、刃部を欠失したうえに半折している。横断面は隅丸方形に近い楕円形状をなす。

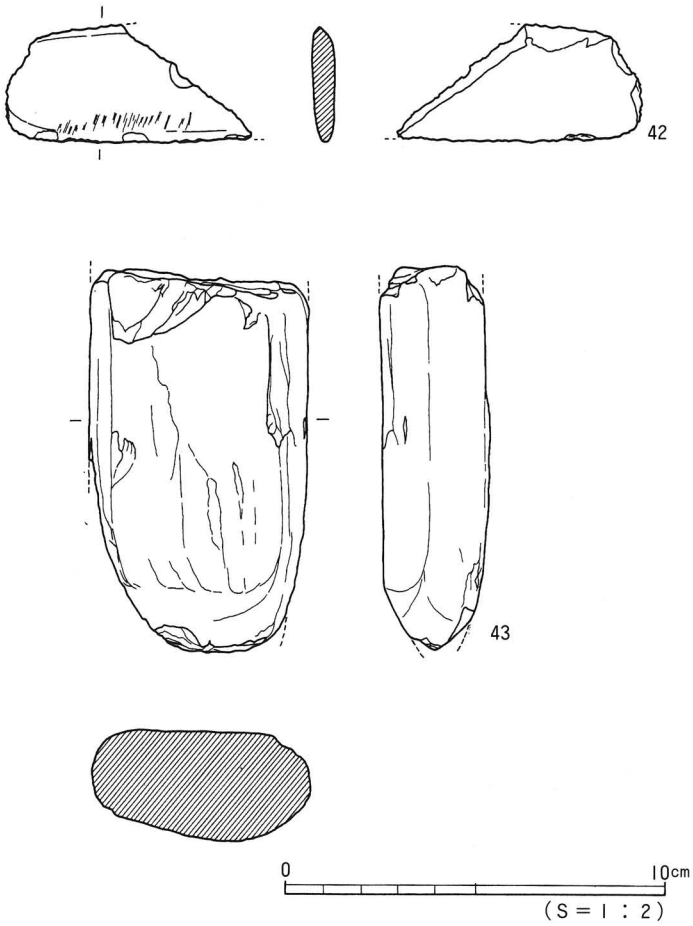


図22　3区出土石器

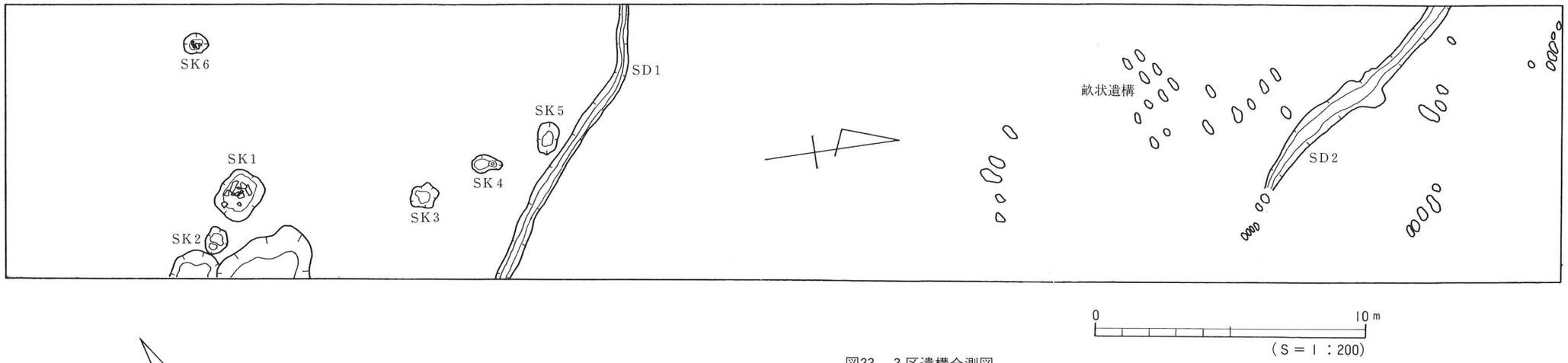


図23　3区遺構全測図

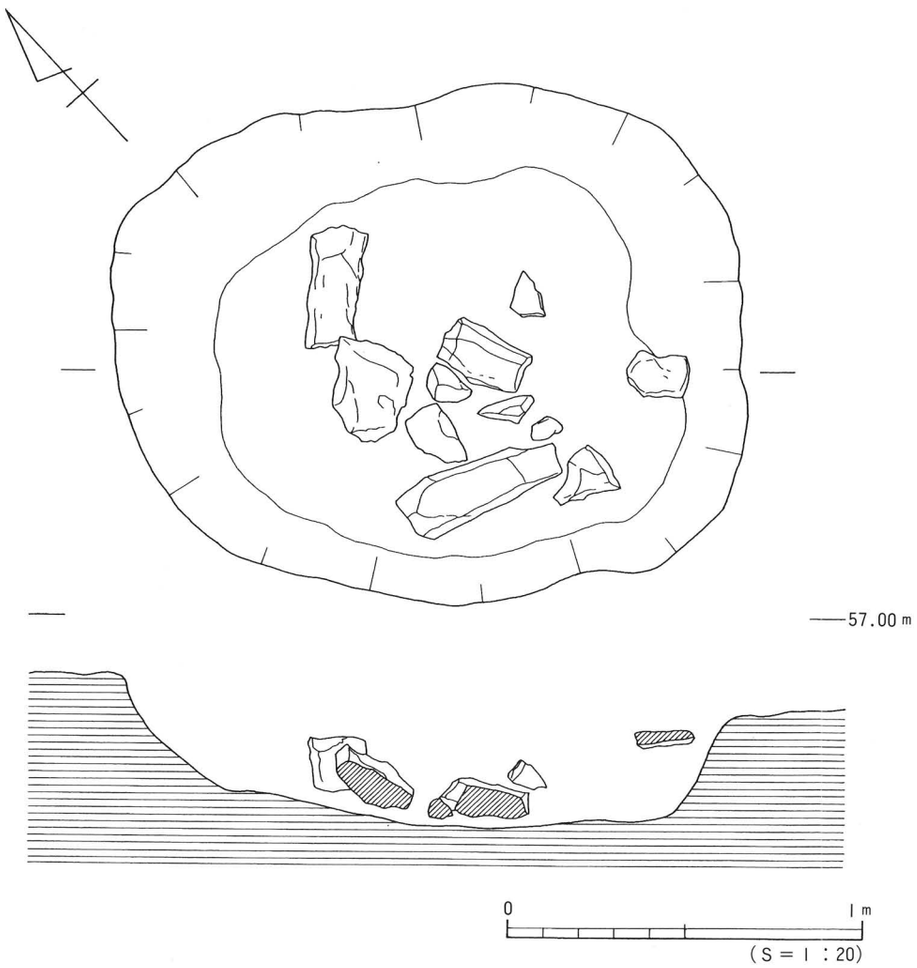


図24　土壙SK1

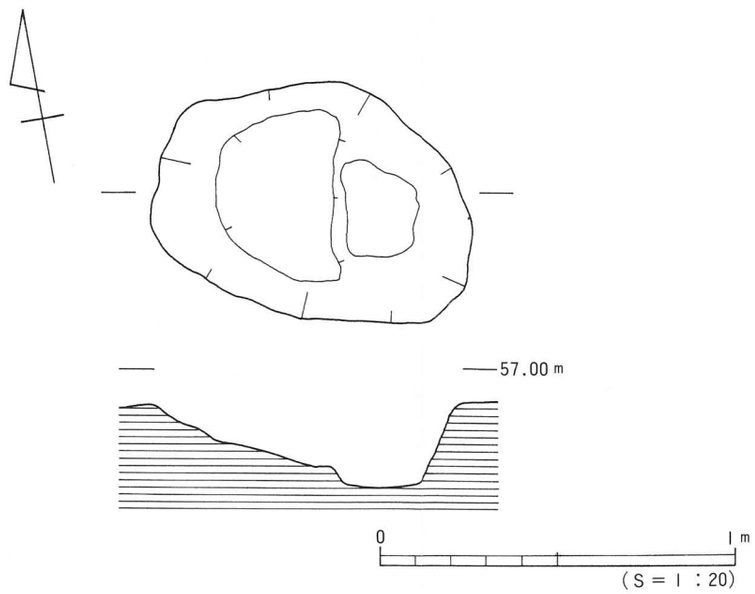


図25　土壙SK2

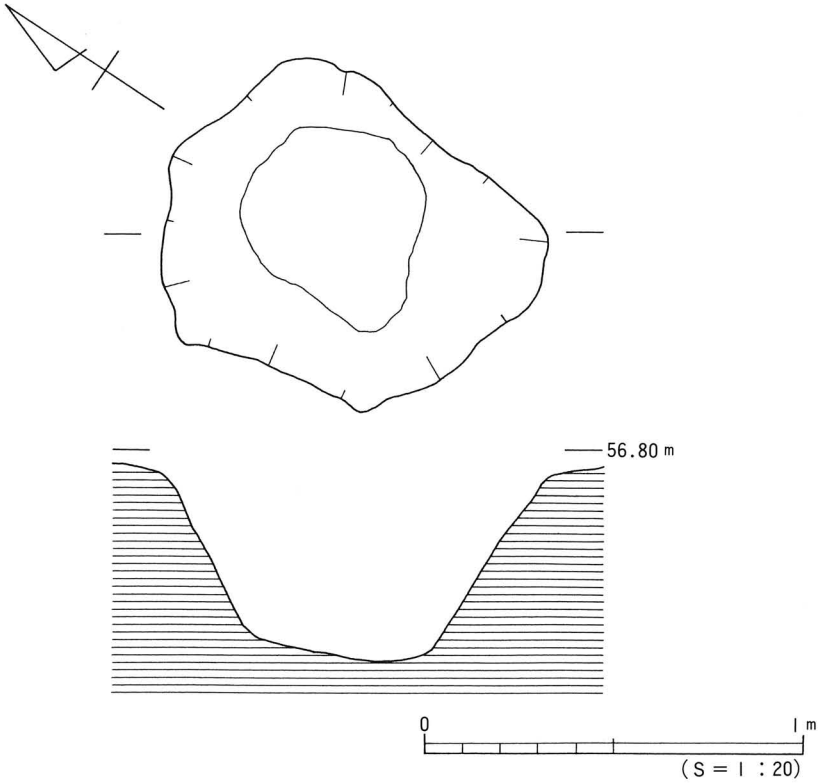


図26　土壙ＳＫ３

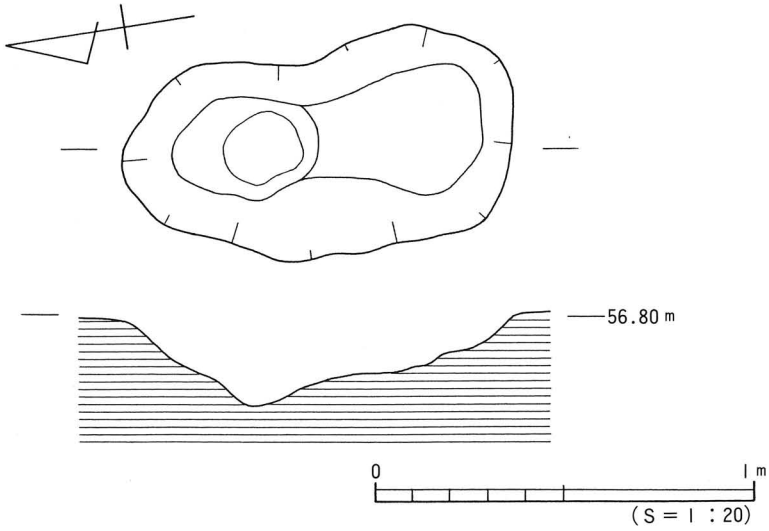


図27　土壙ＳＫ４

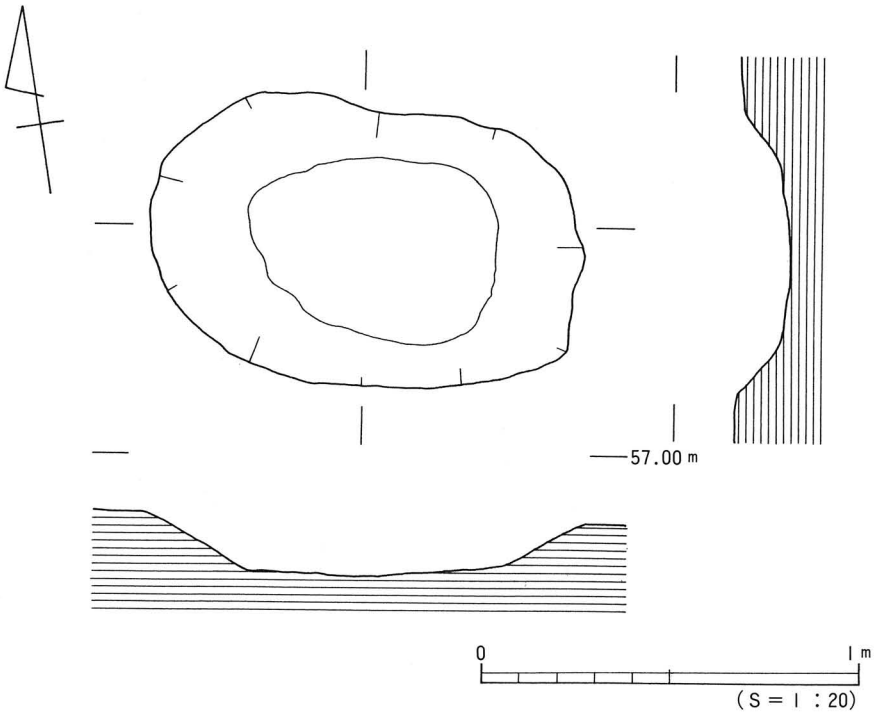


図28　土壙ＳＫ５

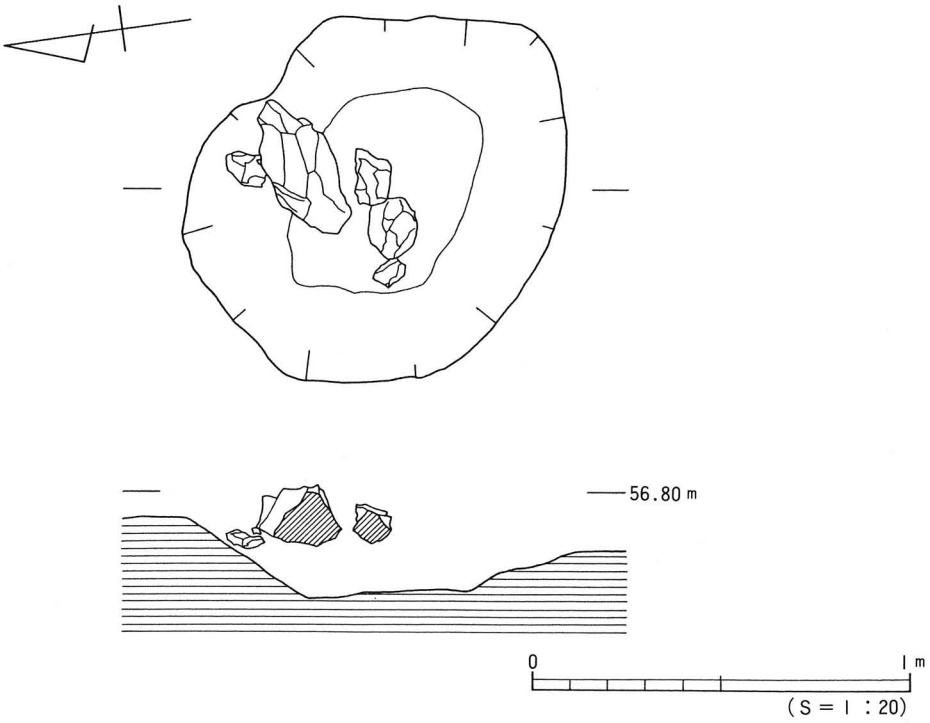


図29　土壙ＳＫ６

（4） 4区の調査

水　田（図30）

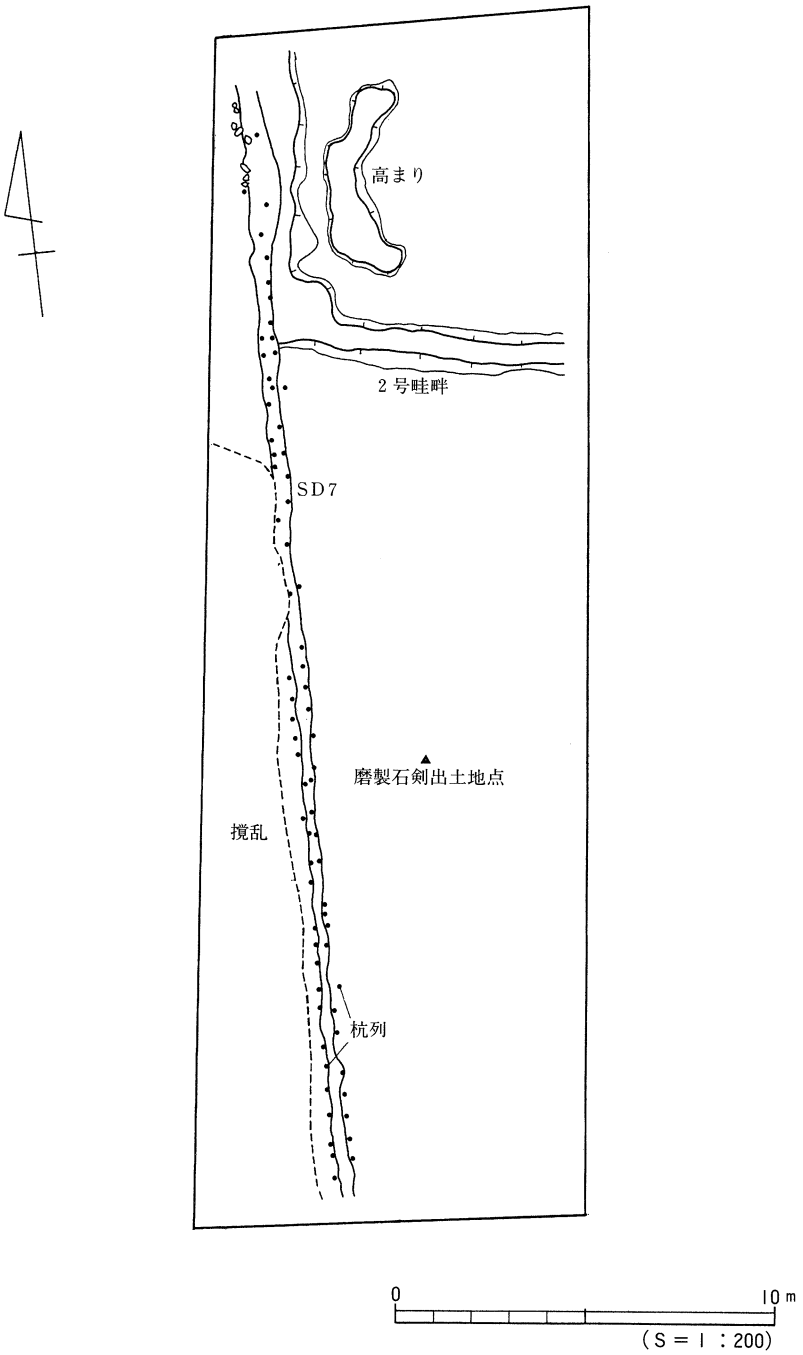


図30　4区遺構全測図

３区の南に隣接する４区では畦畔状遺構２号畦畔で区画された水田と、これを切った状態で杭列を伴った南北方向の溝ＳＤ７が検出された。水田区画内には三ケ月形の高まりがある。出土遺物には、古墳時代・古代の須恵器・瓦片、中世陶器のほかに弥生時代の磨製石剣が１点ある。

４区出土遺物（図31・32）

瓦（図31）

丸瓦（44）　玉縁式丸瓦の小破片である。焼成は比較的甘く、凸面は黄灰色、凹面は黒灰

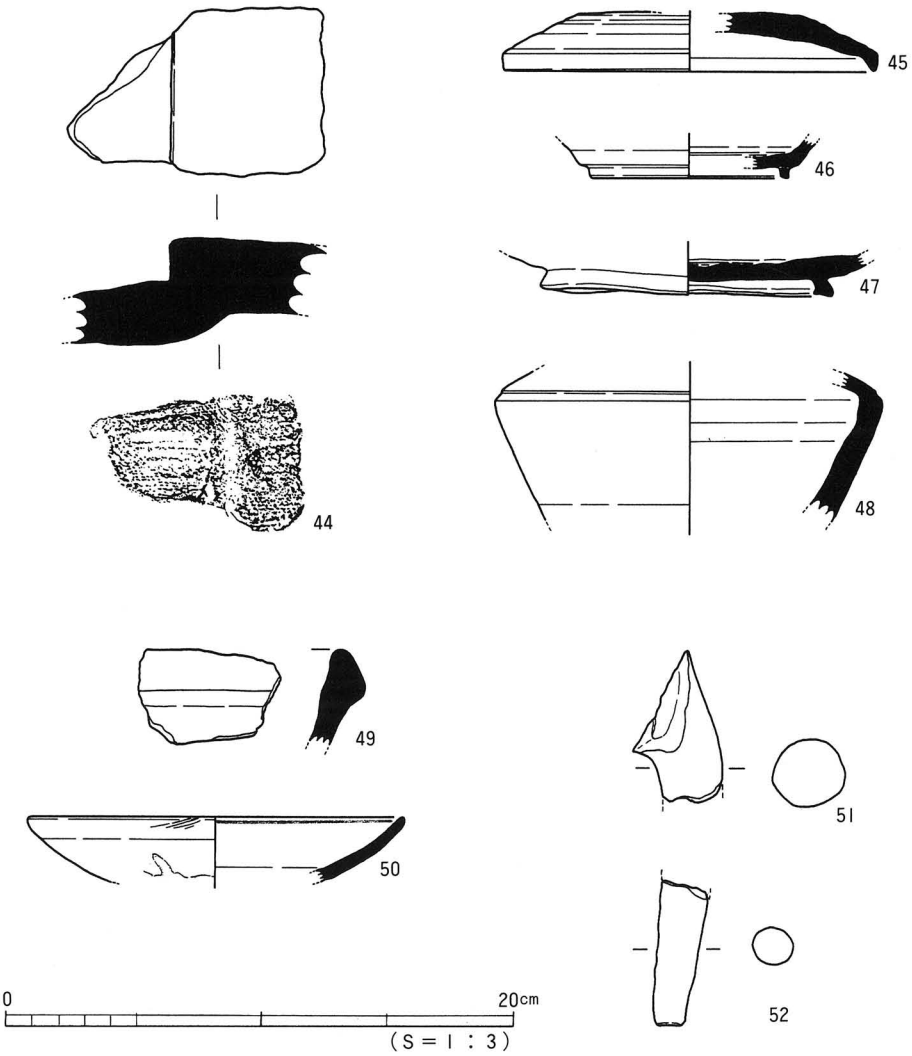


図31　４区出土遺物（1）

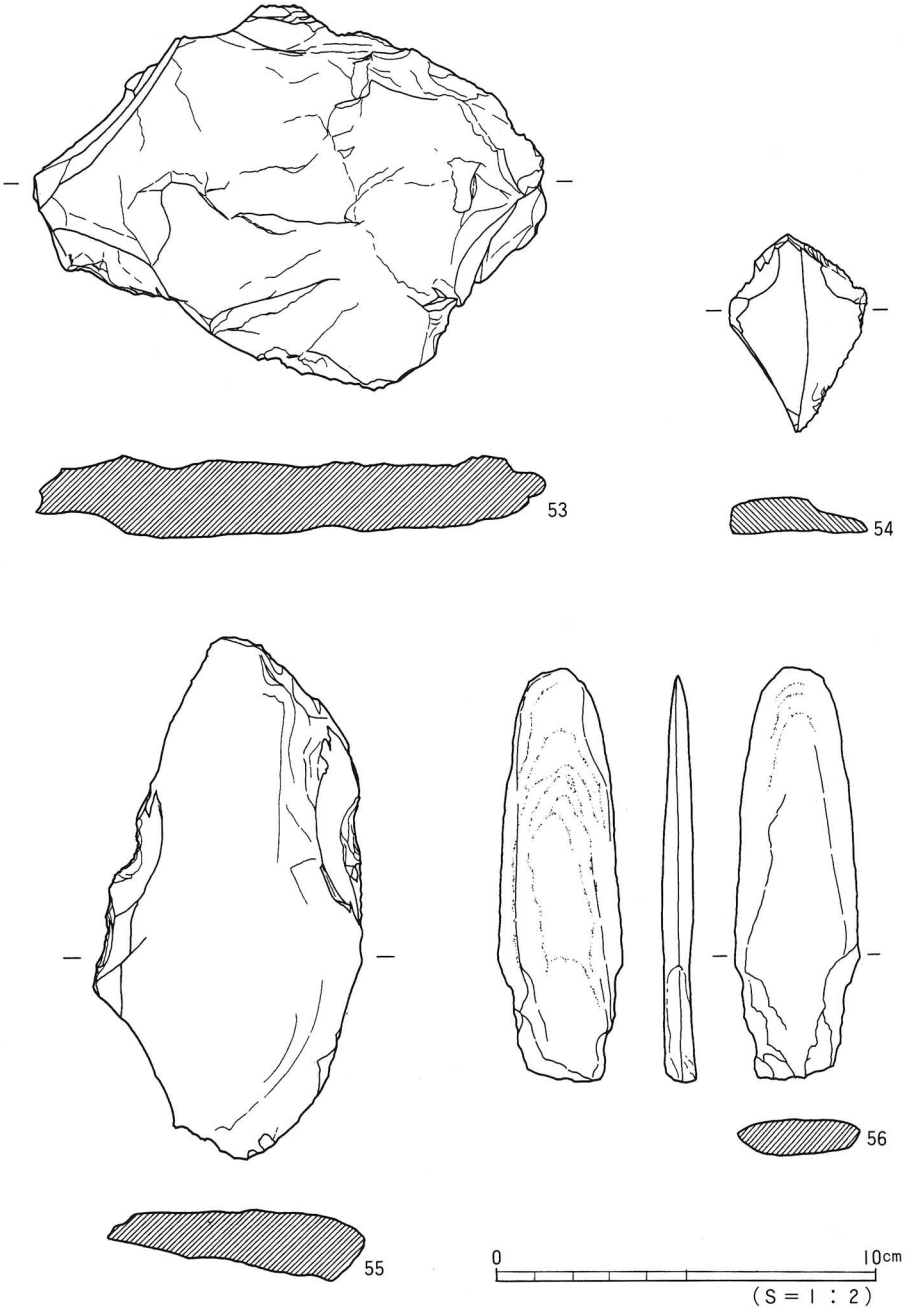


図32　4区出土遺物 (2)

色の色調を呈している。かなり摩滅しているが、凹面には絞り痕や布目の痕跡が観察される。

須恵器（図31）

坏（45・46）　復元口径14.5cmを計る蓋45は、口縁部のかえりを持たない。天井部の約1/2の部分を回転ヘラ削りされる。轆轤は時計方向に回っている。46は高台付きの底部片、復元高台径7.8cmを計る。

壺（47・48）　47は高台付きの底部で、鉢もしくはその他の器種の可能性もある。高台径11.6cmを計る。48は広口壺もしくは長頸壺の胴部片で、屈曲部外面に浅く不明瞭な凹線を施されている。

捏ね鉢（49）　東播系須恵器の鉢口縁部小片で、口縁部の内外面にのみ釉がかかっている。

陶器（図31）

皿（50）　白みがかったうす茶色の釉、外面底部付近は露胎である。内面口縁部には鉄釉による1条の圏線が巡る。胎土は淡灰褐色である。

土師器（図31）

鍋（51・52）　脚部小片2点の出土である。

石製品（図32）

石核（53）　53はアプライト質の石材。周縁部に剥離痕が顕著である。54は両面に自然風化面を持ったサヌカイトの偏平な石材の両側縁の一部を剥離している。

剥片（54）　サヌカイトの剥片。

石剣（55）　緑色片岩を素材とした鉄剣形磨製石剣。全長10.9cm、最大幅3.3cm、最大厚0.9cmを計る。横断面は楕円形に近く鎬を全く持たない。したがって、先端部は丸く仕上げられている。また、関の刳り込みも甘く、全体的にシャープさを欠いた器型である。

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、水田関係の遺構を主とする遺構群が検出された。他の水田址の調査例と同様、これらの水田が機能していた時期の遺物の出土はさほど多くはない。出土した遺物のなかで水田に伴うとみられるものは、土師器坏･鍋、備前焼擂鉢、少量の瓦片である。土師器坏はすべて回転糸切りである。水田出土のものはいずれも細片で良好な資料とはいえないが、１区ＳＫ７に完形に復元され得るものが１点があり、器型・法量ともにこれに倣うものと考えられる。また、時期比定に有効な資料として１区出土の備前擂鉢がある。これらの遺物を総合すると、水田の時期は15世紀後半頃とするのが妥当であろう。なお、２区検出の２号暗渠や、４区で検出された溝ＳＤ７は水田関連の遺構であることにかわりはないが17世紀以降に下る時期のものである。１区１号畦畔や２区の石列を伴った区画に設けられた水口は南から北への水配りのためのものであり、基本的には現在の水田の水配りと変わらない。また、１・２区検出の石詰暗渠状の遺構は「はる田」・「ふけ田」といわれる湿田の改良のための排水の機能を果たしていたものと考えられる。

その他、今回の調査で出土した遺物のうち注目されるもののひとつに磨製石剣がある。石材は緑色片岩で、鎬の稜は無いに等しく、また関の刳り込みも非常に甘い。遺跡全体を見回しても弥生土器の出土は３区において図化不能な中期と思われる甕の口縁部細片が１点あるのみで、この石剣の詳細な時期については言及し難いが、この形態からみて前期まで遡ることはあるまい。愛媛県内における磨製石剣の出土は30数例を数え、うち９例が有柄式磨製石剣で、残りのほとんどが本例と同様の鉄剣形石剣で、ごく僅かの例を除いて表採品である。今回の例も調査出土とはいえ、包含層出土で遺構や共伴遺物等がみられない点では他の諸例と同様一級資料たり得ないのはやむを得ないが、少なくとも出土地点・層位だけでも把握されていることは評価されてもよかろう。

なお、出土遺物には打製土掘り具、石鏃等の石器や古墳時代・古代の須恵器、近世の磁器など各期の遺物が含まれているが、このことは調査地周辺のそれぞれの時期の遺跡分布を反映してのことであることは言うまでもない。

抄　録

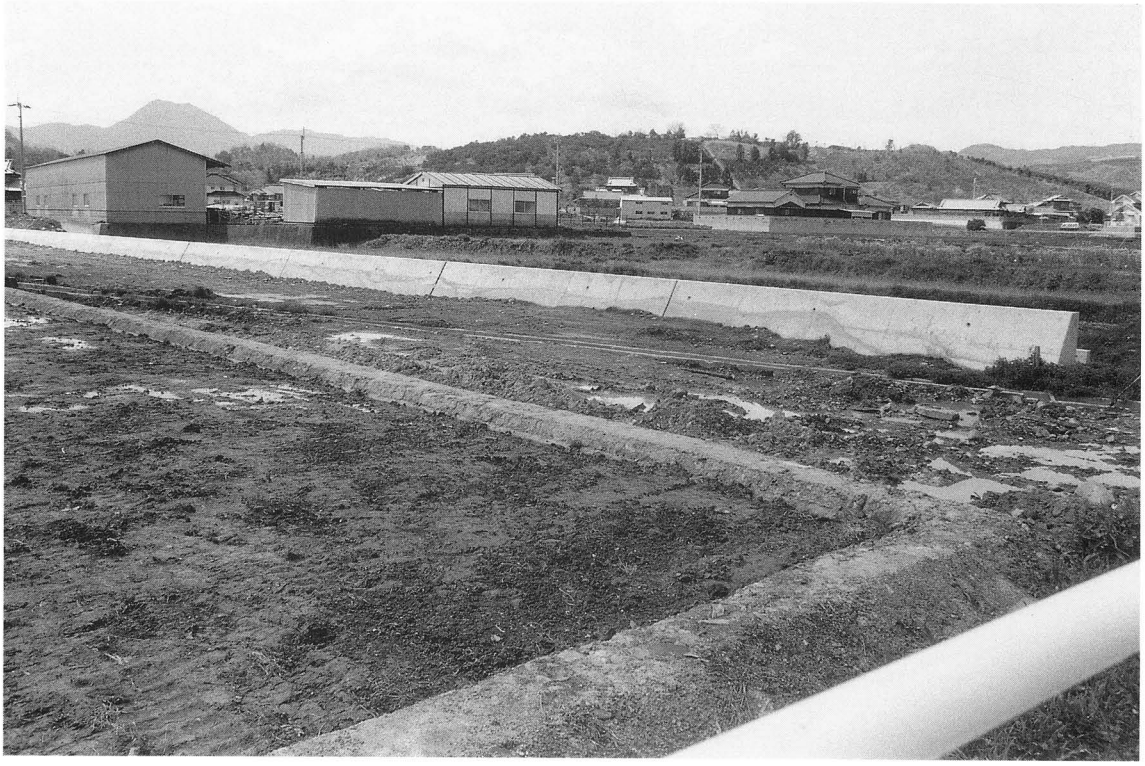
ふりがな	うえのいせき
書名	上野遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第39集
編著者名	栗田茂敏
編集機関	財団法人 松山市生涯学習振興財団　埋蔵文化財センター
所在地	〒791 愛媛県松山市南斎院町乙67－6　Tel 0899－23－6363
発行年月日	西暦 1994年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
上野（うえの）	愛媛県松山市（えひめけんまつやまし） 上野町（うえのまち）	38201		33° 46′ 13″	132° 48′ 16″	19930212～ 19930927	2,400	松山市道久谷97号線新設に伴う事前調査

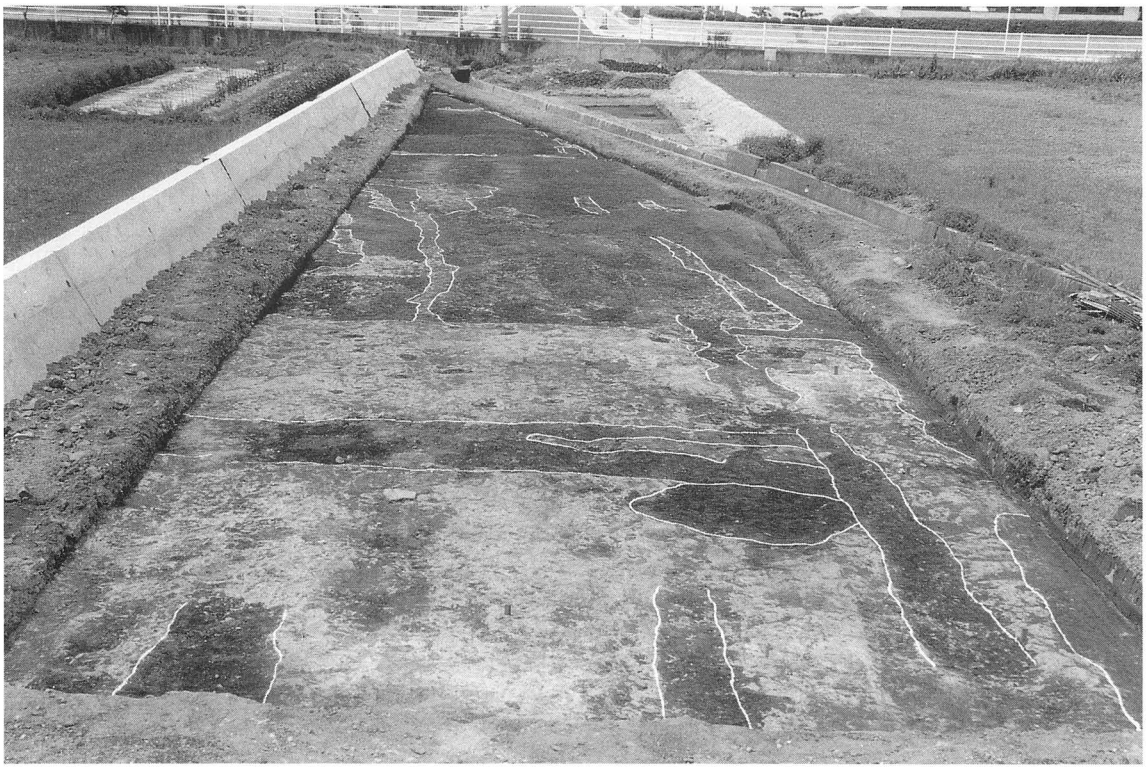
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上野	田畑	中世	水田畦畔、暗渠 畝状遺構、溝	陶器・土師器	
		近世	暗渠、溝	陶磁器	

図　版

調査地全景（南より）



1・2区調査前全景（北東より）

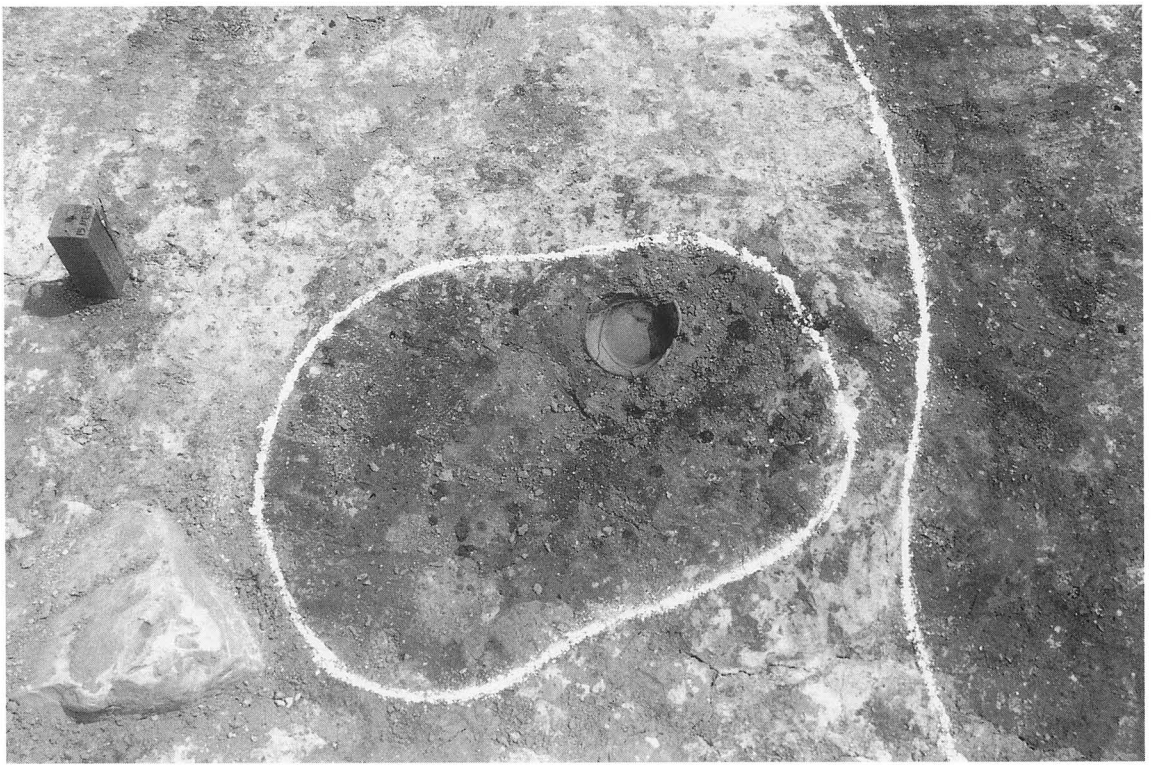


Ⅰ区遺構検出状況（南より）

Ⅰ区遺構検出状況（北より）

Ⅰ区擂鉢出土状況

Ⅰ区土師器鍋出土状況

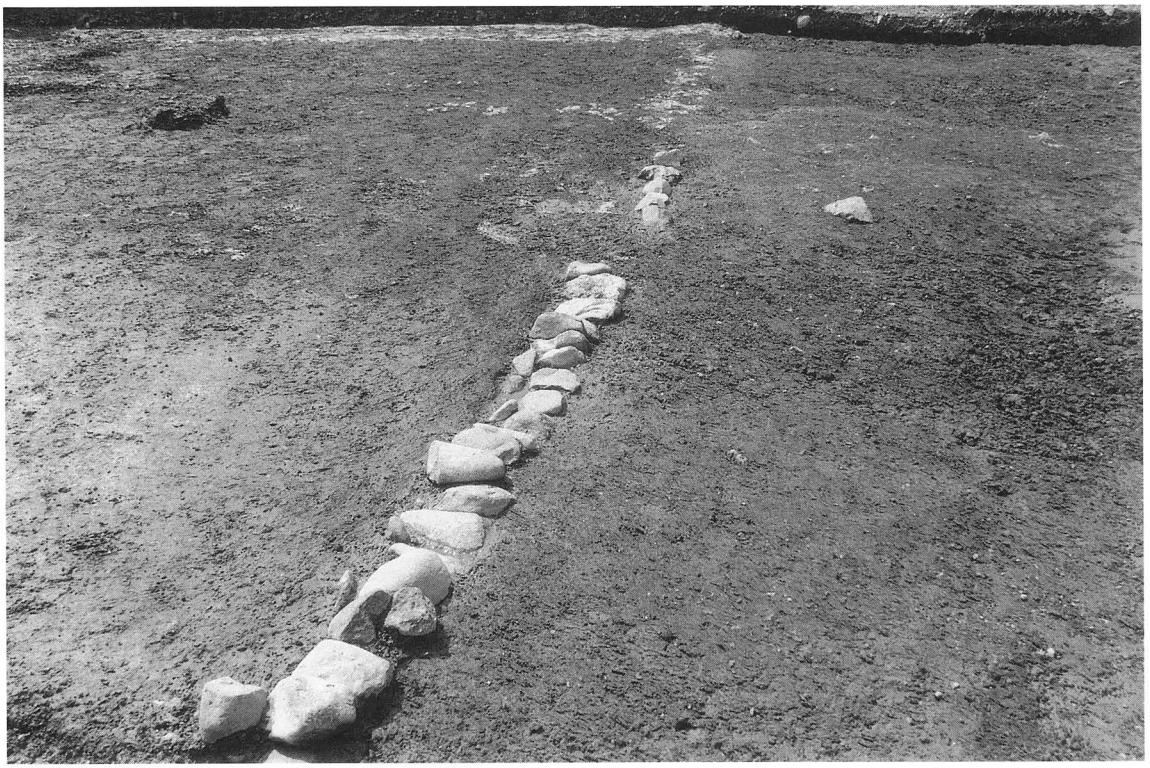


SK7遺物出土状況

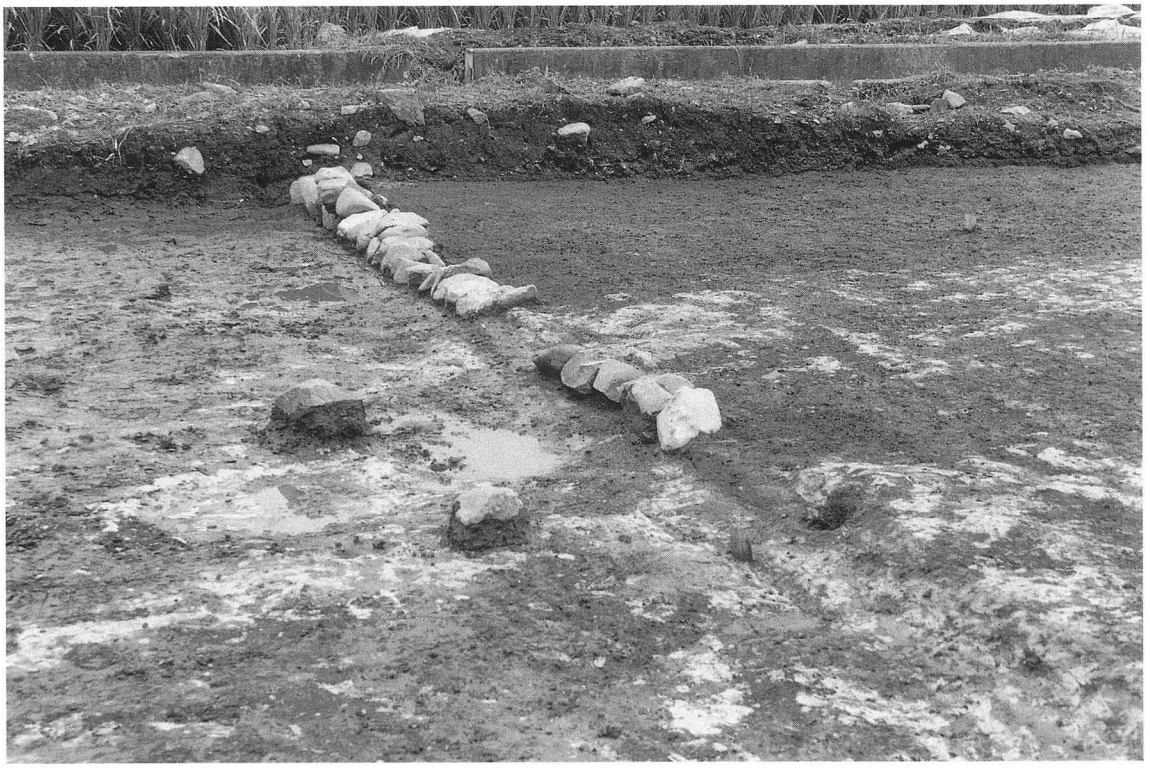
SD6（南西より）

2 区遺構検出状況（南より）

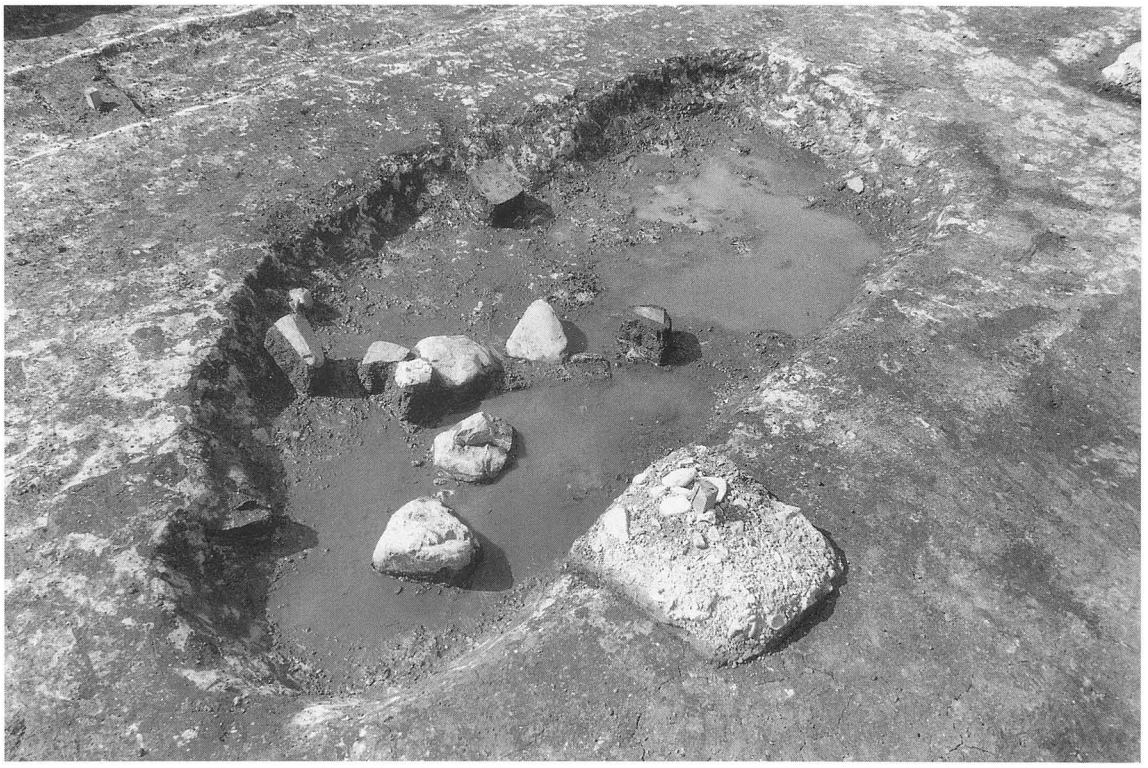
2 区遺構検出状況（北より）



2 区検出石列（東より）

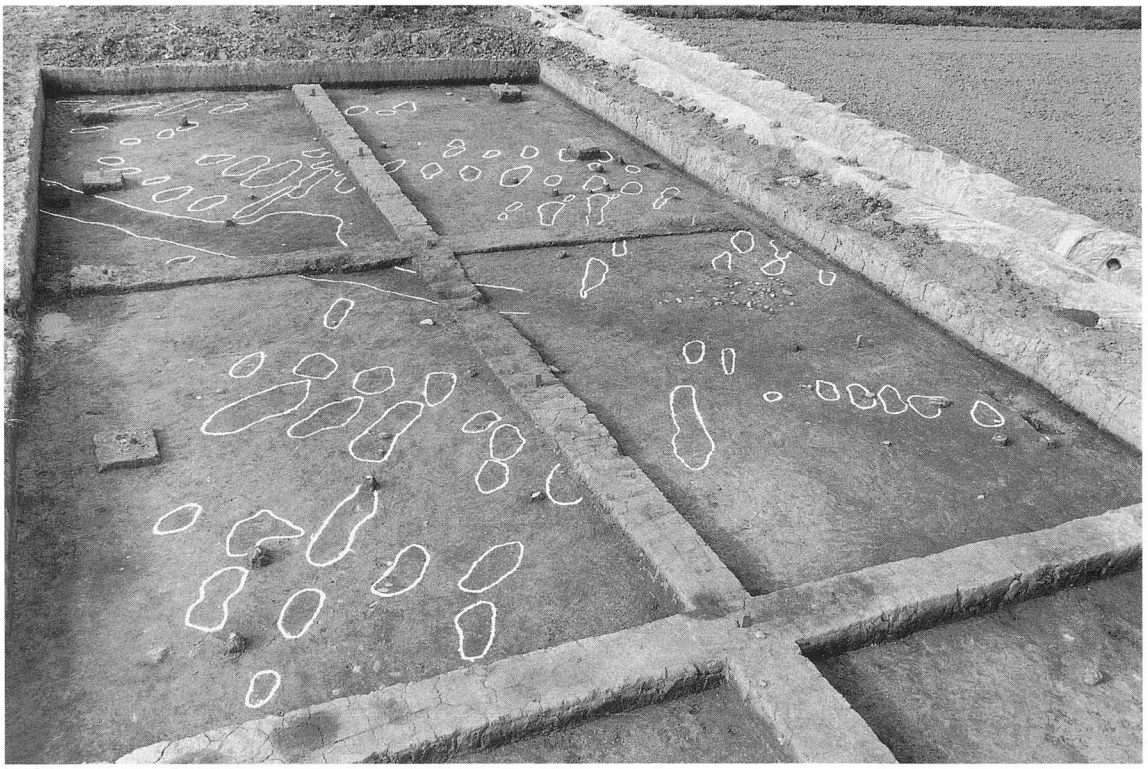


2 区検出石列（西より）

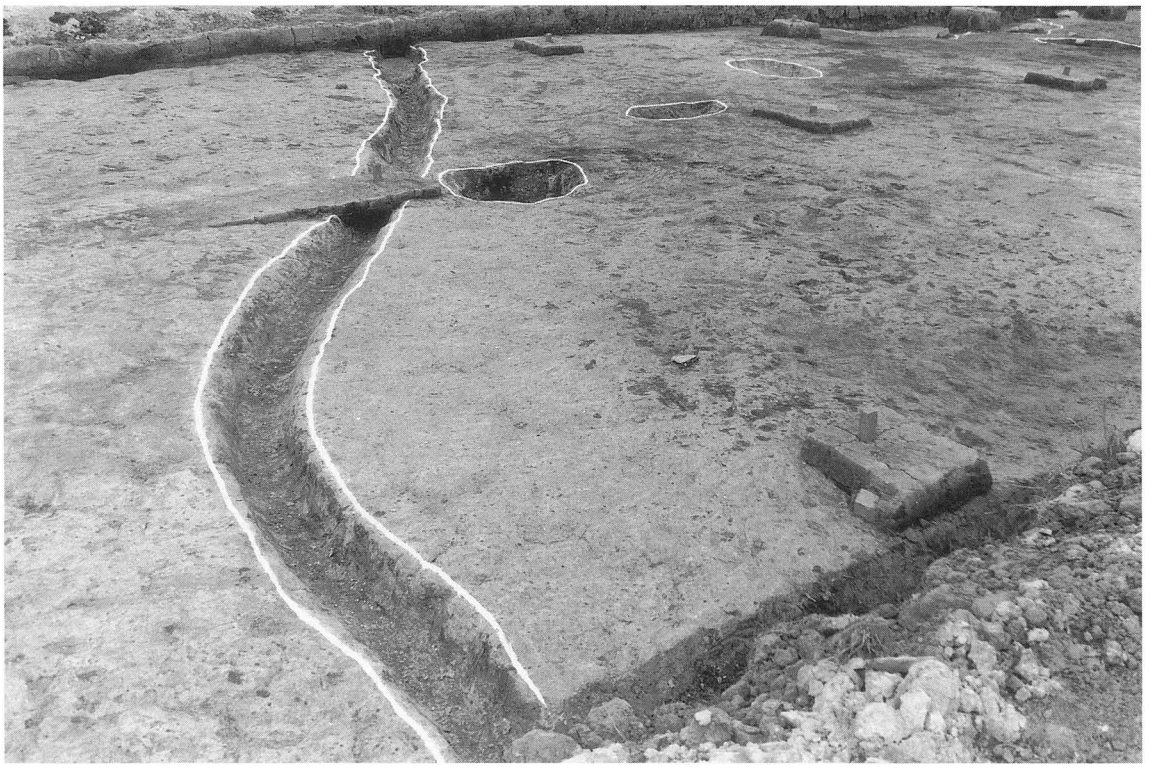


SK8（南東より）

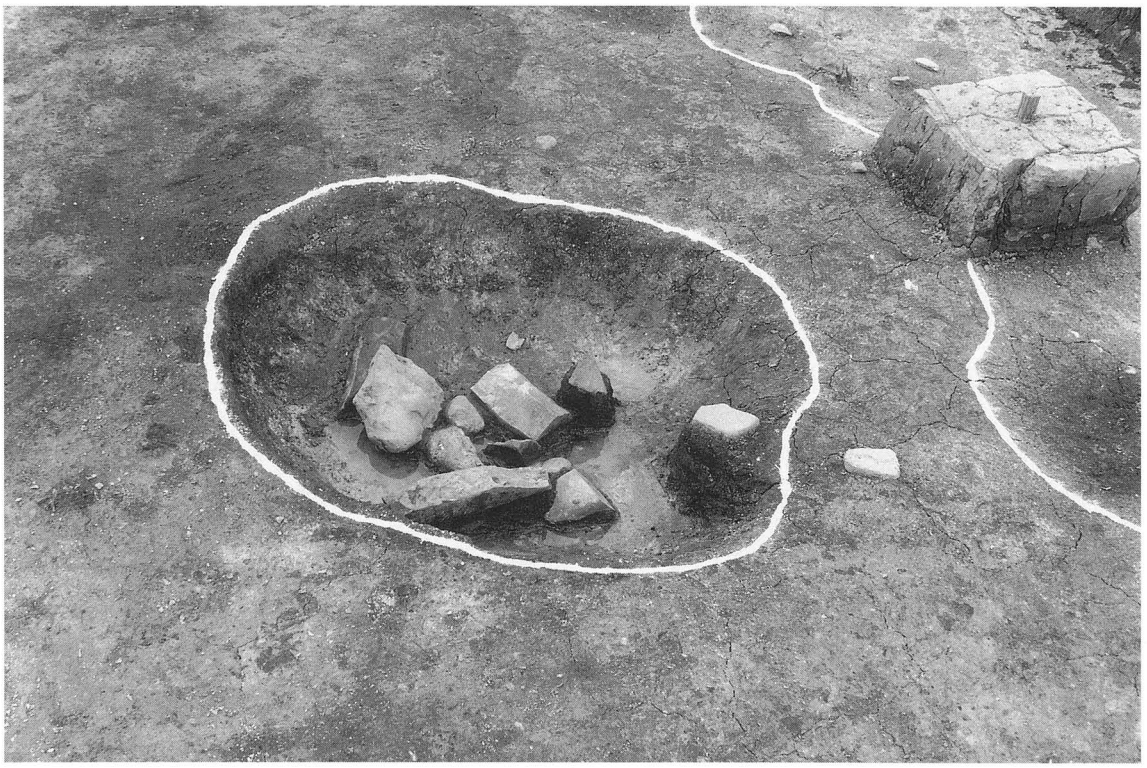
3区西壁土層（東より）



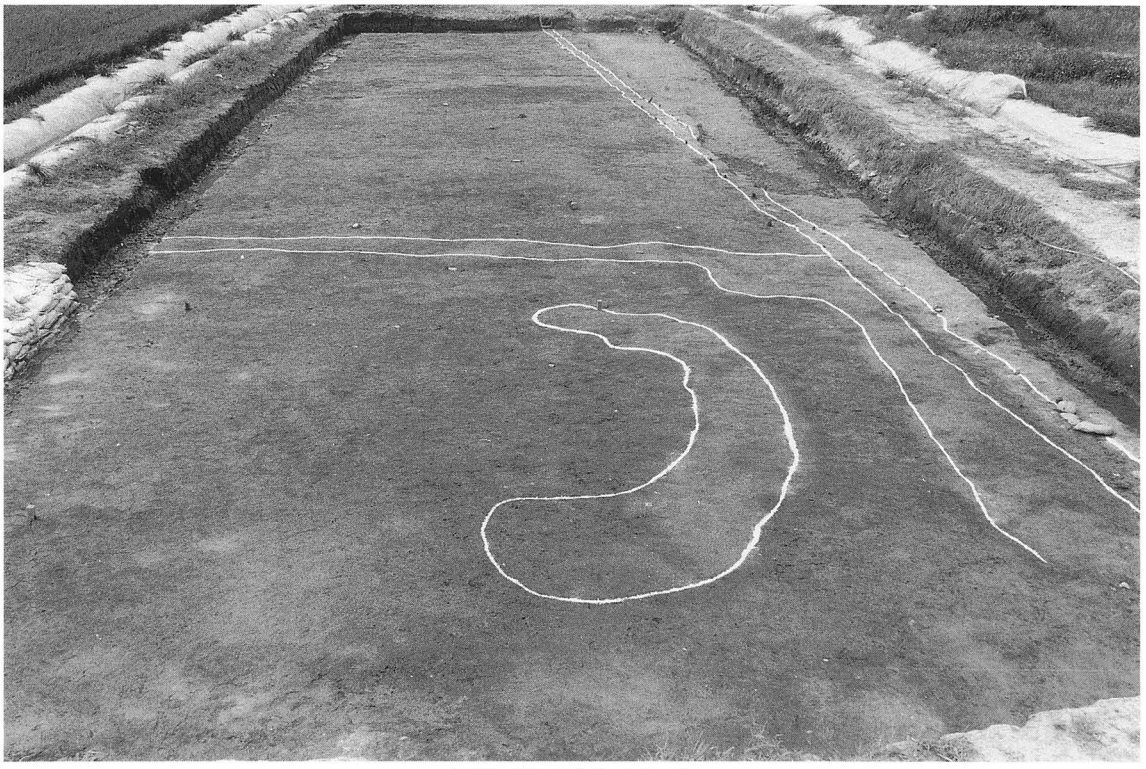
3区検出耕起痕（北より）



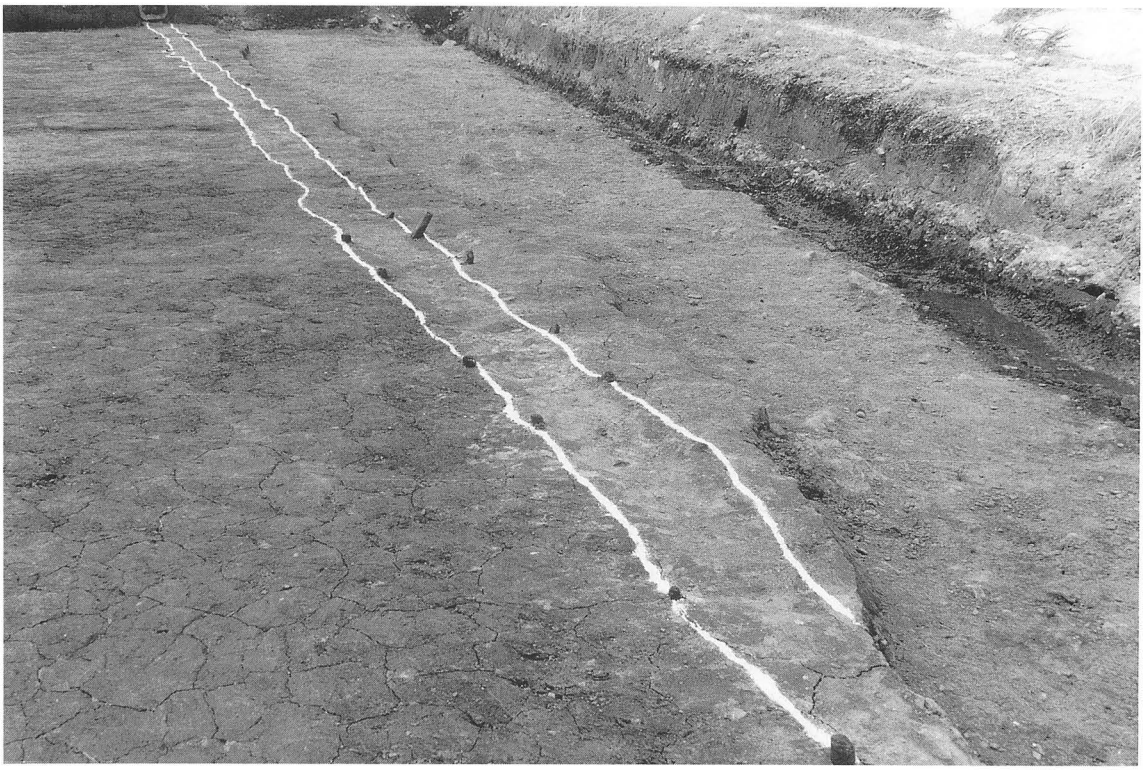
SDI（西より）



SKI（南西より）



4区遺構検出状況（北より）



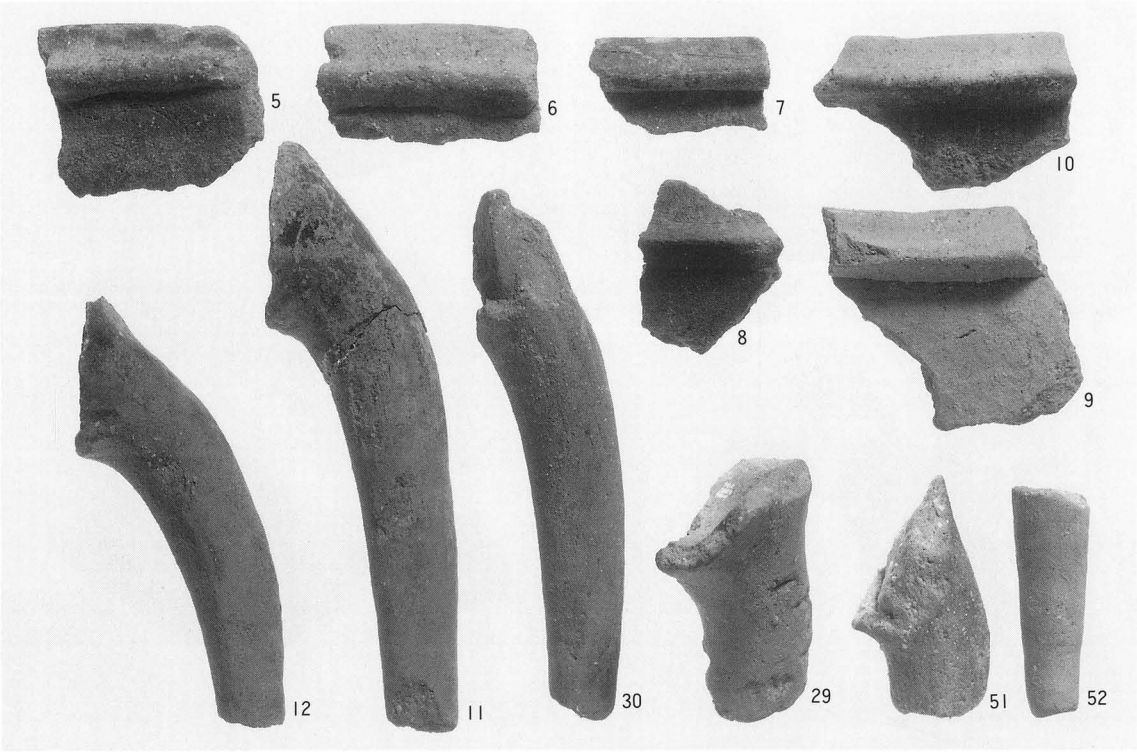
ＳＤ７と杭列（北東より）

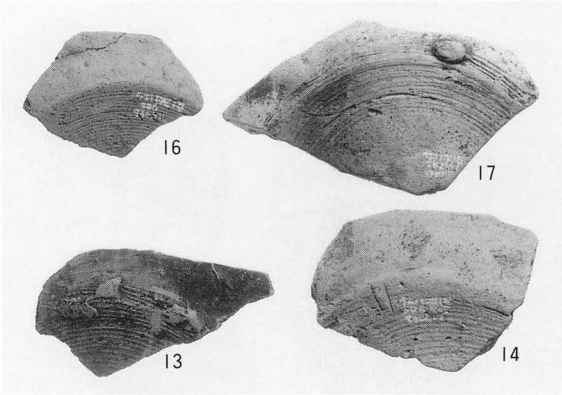
ＳＤ７完掘状況（北より）

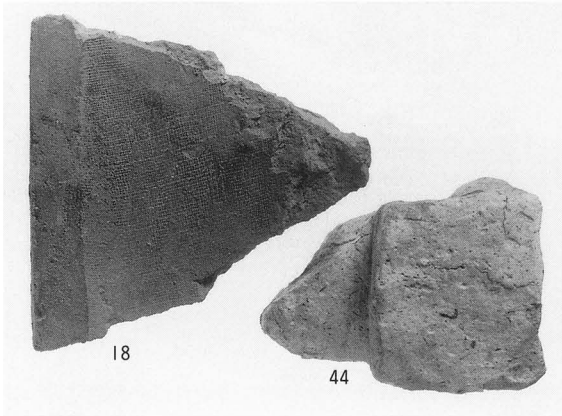
4 区磨製石剣出土状況

4 区須恵器出土状況

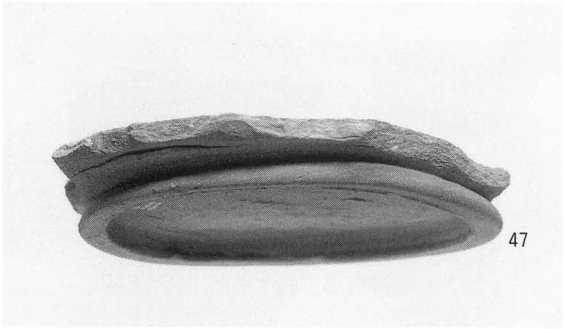
出土遺物(1)（陶器）

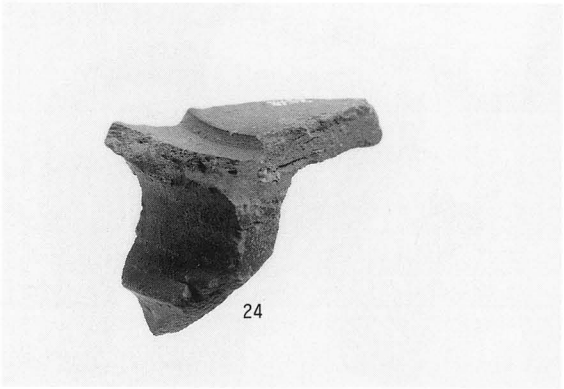


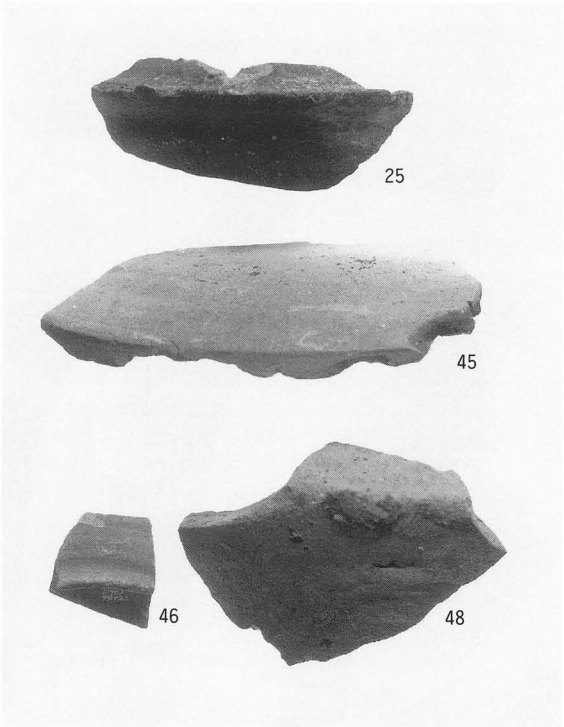


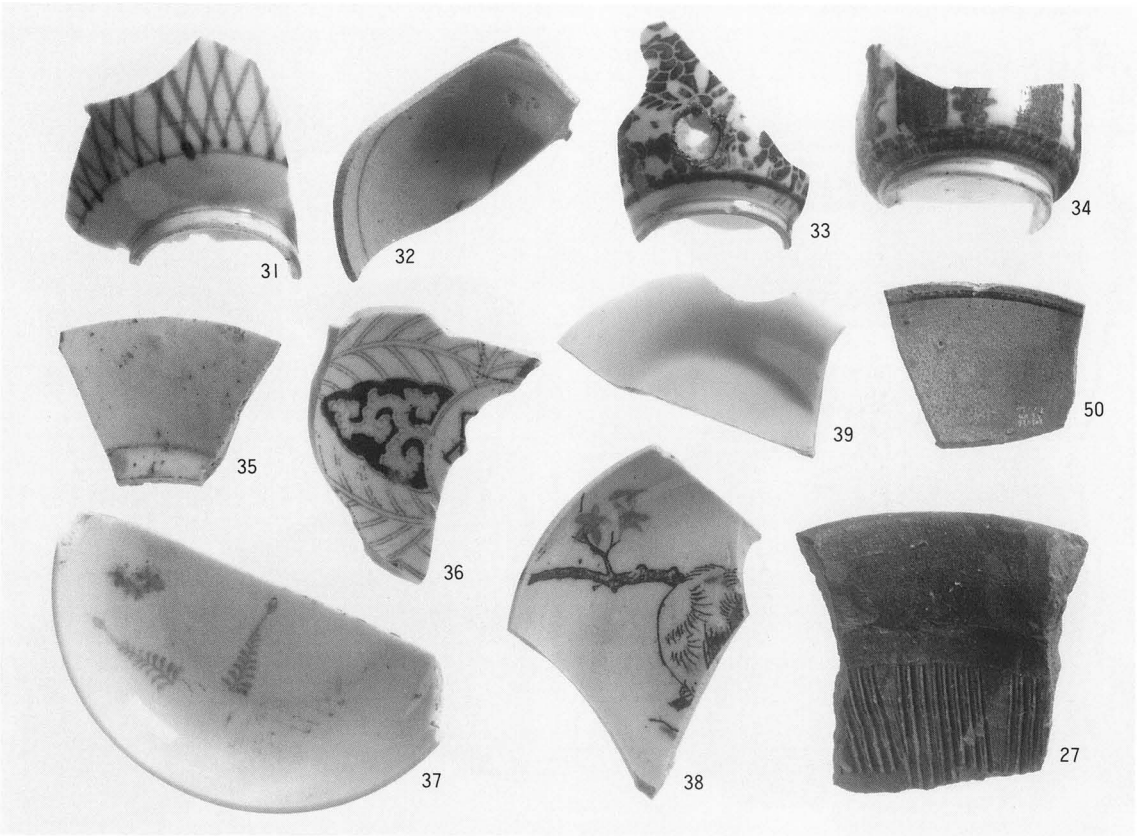


出土遺物(2)（土師器・瓦）

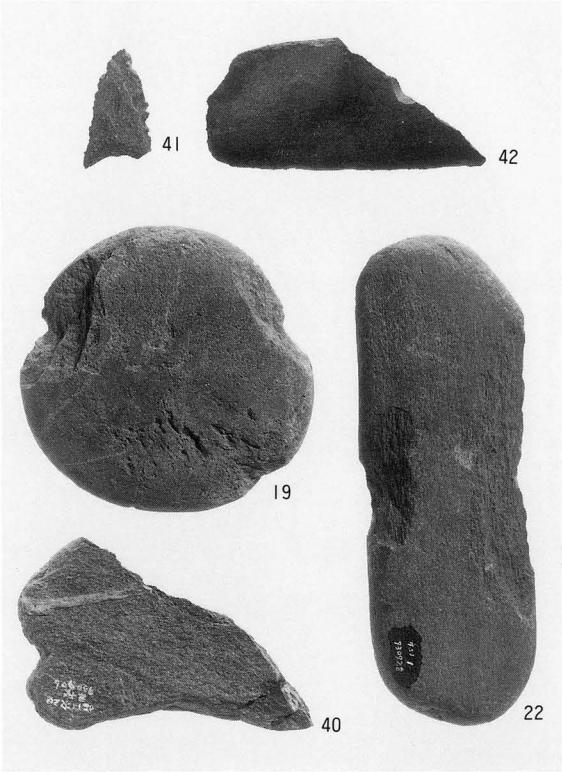


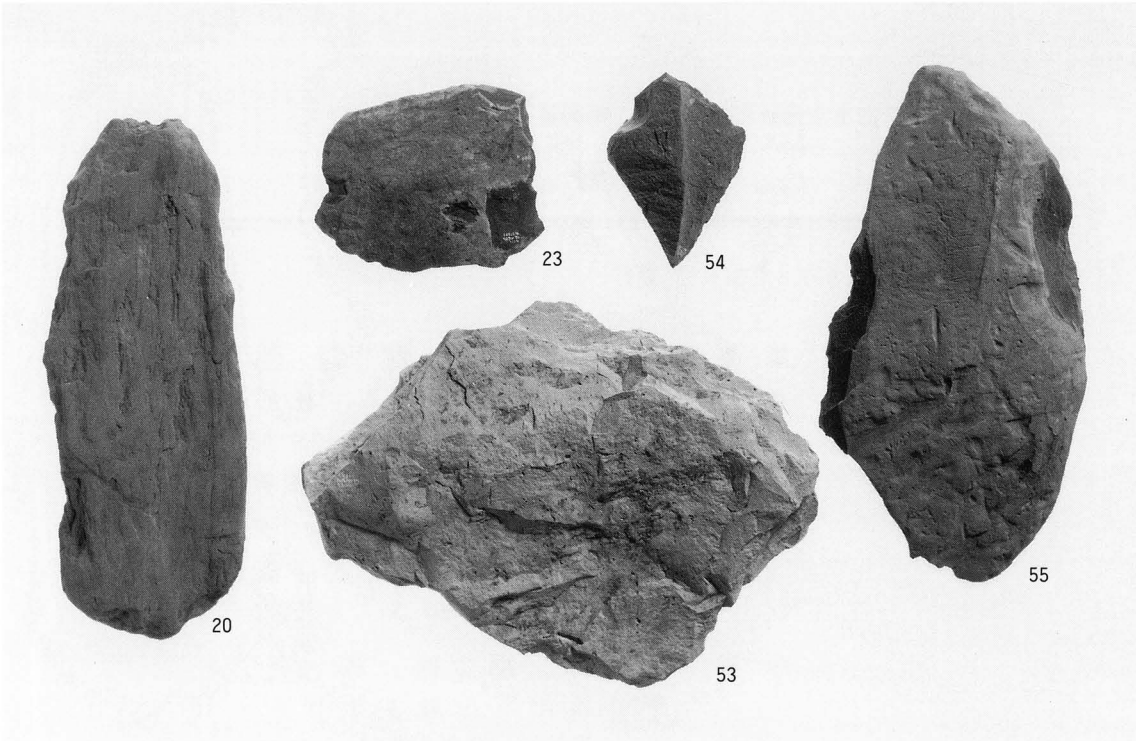






出土遺物(3)（須恵器・陶磁器）





出土遺物(4)（石製品）

松山市文化財調査報告書　第39集

上　野　遺　跡

平成６年３月31日　発行

編　集　松　山　市　教　育　委　員　会

発　行　〒790 松　山　市　二　番　町　４　丁　目　７　－　２
ＴＥＬ　(0899)　４　８　－　６　６　０　５

財団法人　松山市生涯学習振興財団
埋　蔵　文　化　財　セ　ン　タ　ー
〒791 松　山　市　南　斎　院　町　乙　67　番　地　６
ＴＥＬ　(0899)　２　３　－　６　３　６　３

印　刷　原　印　刷　株　式　会　社
〒791 松　山　市　山　越　４　丁　目　８　－　15
ＴＥＬ　(0899)　２　４　－　８　８　２　３